



改訂 小学校文章読解力検査

— 小学校4. 5. 6年用 —

ちゆう い
注 意

れん しゅう
練 習

1. いつもの先生のいうとおりにしてください。
2. 「開け」といわないのに、開いてはいけません。
3. 「始め」といつてから「やめ」というまで、正確にしかもできるだけはやくやりなさい。
4. もんだいは番号じゅんにしなさい。しかし、むずかしいのはのこしてすすみ、時間があつたらあとでしなさい。
5. まちがってもけしゴムをつかわないで、えんぴつで×をつけてなおしなさい。
6. 「やめ」と、いったら、とちゅうでもやめなさい。

ぼくのうちは、おふろやです。
それで、ぼくは、二時と七時と二かい、おふろにはいります。
二時ごろには、赤ちゃんがおおぜいはいっています。
おふろの中では赤ちゃんのなき声が、たくさんきこえます。

赤ちゃんのなき声のたくさんきこえるのは、

1. 七時ごろ
2. 二時と七時ごろ
3. 二時ごろ
4. よなか
5. 夕がた

第一部 速 読

1 まさおは、キャラメルをなめ、はるおは、あめをほおぼっていました。はなこはそれを見していました。

あめをほおぼっているのは

1. まさを 2. はなこ 3. まさおとはるお 4. はるおとはなこ

5. はるお

- 2 くもをぬってとびつづけました。まどから下を見ると、雪をかぶったふじ山が、あたまを出しています。はこにわのような、いいながめでした。

これは

1. 空のたび 2. 汽車のたび 3. バスのたび 4. 電車のたび
5. 船のたび

- 3 きいろとくろの、しまのもよのついた大きなくもがいました。からだかふとっているうえに、足がながくて、みたところ、なかなかおそろしく、つよそうでした。

このくもは

1. やせている 2. つよそう 3. きれい 4. すをはる 5. いじわる

- 4 ベルがリリンとなると、「ポーツ」ときてきになりました。まどから手を出してハンカチをふっている人もありました。

この汽車はいま

1. こんでいる 2. とまる 3. でる 4. はやい 5. あぶない

- 5 ありたちは、ガラスびんに入れた土にいっぱいあなをつくりました。とんぼのしんだのをいれてやったら、みんなあつまってきて、いそがしそうにいったりきたりしていました。

あなをつくったのは

1. あり 2. とんぼ 3. ガラス 4. ねずみ 5. はち

- 6 みんなねずまっで、おき時計だけがコチコチと音をたてています。時々ポーという汽車のきてきもさびしそうにきこえてきます。

あたりは

1. あかるい 2. しずか 3. にぎやか 4. やかましい 5. まぶしい

7 でんしゃのなかには、身うごきもできないので、きゅうにとまったり、またきゅうにはしゃしたりすると、みんなはどっとまえにのめったり、うしろへよろけたりしました。

このでんしゃは

1. はやい 2. すいている 3. ふるい 4. こんでいる 5. おそい

8 「ズドン。」と、音がしたので、子うさぎたちは、あわててにげだしました。あまりあわてたので、いっぴきの子うさぎが、さかみちに足をすべらせて、ころがりおちました。

うさぎをねらっているのは

1. りょうし 2. おおかみ 3. 犬 4. わし 5. くま

9 キャベツのはっぱに、もんしろちょうが、たまごを七つうみつけていました。そのうち、だいたい色は五つ、白い色は二つでした。

たまごのかずは

1. 二つ 2. 五つ 3. 七つ 4. 九つ 5. 十四

10 五人はいつもなかよしだ。くりくりした目をしているのは、みっちゃん
で、ひろちゃんに、えくぼがあり、まさこちゃんには、ほくろがあった。
はる子ちゃんは、赤いほおだったし、さよ子ちゃんは黒いかみの毛をして
いた。

ほくろのあるのは

1. はる子ちゃん 2. さよ子ちゃん 3. みっちゃん 4. ひろちゃん
5. まさ子ちゃん

11 わたしの村へバスがかようのは、ゆきのきえる五月からはつゆきのふる十二月までです。夏には、山に登る人がたくさんとおるので、とてもにぎや

かです。

にぎやかなのは

1. 雪のきえるころ 2. 夏 3. 秋 4. 十一月ごろ 5. バス

- 12 まっ白な雪げむりをあげて、右や左にまがりながら、山をすべりおるときのようすは、ちょうどおいかけられているうさぎのようです。

これは

1. スキー 2. スケート 3. かけっこ 4. うさぎ 5. じどうしゃ

- 13 とった魚をいっぱいつんで、船が入ってくると、サイレンがなりわたり、いままでひっそりしていた家家から、いちどに、おとなも、子どももとびだしてくる。きしから船へ、はしいたがわたされて、魚をはこびだすよういがされる。

これから

1. サイレンがなる 2. ひっそりする 3. 船が出る 4. いそがしい
5. しずかになる

- 14 そのさらには、らくだをひいて、とぼとぼ歩いている老人の絵がやきつけてありました。それがゆうがたの雪あかりの中で、しずんでみえました。

この絵は

1. おかしい絵 2. さびしそうな絵 3. あかるい絵 4. にぎやかな絵
5. わかりにくい絵

- 15 おとうとは、「しんぶんをもっておいで。」といわれたので、ねえさんのつくえの上にあったのをとって、おとうさんのところへもっていきました。

しんぶんをもっていったのは

1. おとうさん 2. にいさん 3. ねえさん 4. おかあさん 5. おとうと

- 16 みつばちは、一びきの女王ばちと、一、二万びきから五、六万びきのはたらきばちと、いくらかのおばちが、いっしょに、なかよくくらしています。女王ばちは、たまごをうむことしかしません。食べ物、はたらきばちに食べさせてもらいます。

いちばん数の多いのは

1. みつばち 2. 女王ばち 3. はたらきばち 4. おばち 5. めばち

- 17 夕方になった。戸口をしめにいくと、向こうの西の空が赤くなっている。「夕日が出ている。」とひとり言をいって、じっとながめっていると、だんだん明るくなってくる。ぼくは戸口をあけたまま、弟に「こい。」といった。弟は「なんだい。」といった。「早くこないと、なくなるじゃないか。」と、ぼくはどなった。

早くこないとなくなるのは

1. おやつ 2. ぼくのかげ 3. 夕やけ雲 4. にじ 5. 夕日

- 18 水とうや、リネックサックや、おべんとうや、おかしで、いっぱいにくらんだかばんをもった小学生たちが、水のふき出るようなくあいに、勢いよく車の中に入って来ました。「さあ、さあ、静かに、気をつけてのりましょうね。」こうおっしゃった先生の声などは、だれひとり耳に入れているようすもありません。

この遠足は

1. 帰り 2. 行き 3. もうすぐおひる 4. 終わった
5. これから集まる

- 19 わか草のにおいも、白いまっすぐな道も、青いくもも、ひばりの声も、みんな春のよろこびをあらわしていました。

なかでも、はねまわる子馬のすがたが、まぶたにやきついています。

いちばん強く感じたのは

1. 白い道 2. 青い雲 3. わか草 4. 子馬のすがた 5. ひばりの声

20 はくちょうは、ことしも海をわたって、やってくるでしょう。すんだぬまの水は、もうつめたくなって、北の国からとんでくるはくちょうをまっています。

はくちょうをまっているのは

1. 北の国 2. 海 3. こうえん 4. ほり 5. ぬま

21 どこからか飛んできて、すいすいと水の上を飛ぶつばめ。もうたいていどこの家でも、つばめのひなはかえて、口だらけの顔を出して、親の帰りを待っている。子つばめの頭のとっぺんには、ぼつぼつ毛が生えている。子がキイキイ鳴くと、表で、親がキイキイよんだ。

つばめの子は

1. すいすい飛ぶ 2. やっと飛べる 3. まだとべない
4. 親がよぶと飛ぶ 5. 親の先に帰って来る

22 良太の家の庭^{にわ}のすみに、こわれかけた鳥小屋がありました。もと、その鳥小屋に、三ばのにわとりがいたのですが、良太が小学校にあがった年の春ある朝のこと、にわとりが三ばとも一度にいなくなっていたのです。鳥小屋には、白いはねがいっぱいちらばっていました。

にわとりは

1. 一わだけいなくなった 2. にげた 3. 病気で死んだ
4. なにかにとられた 5. かくれていた

23 やすしくんのからだは、いつみても、あかやほこりで、ひどくきたなくなっています。あせを出したままふかないでいるので、よけいにきたなくなっているのです。頭の毛の中には、土やすながたまっています。手や足はどろや、クレヨンや、油などで、まっ黒です。

やすしくんのからだのきたないわけは

1. あせをふかない
2. 図画をかいた
3. きたない遊びのあと
4. ふろがきらい
5. おてわだいをした

- 24 東京のようすを、おしらせします。この二三日はもう暑くて、日中などは、ま夏のような天気です。もうすぐつゆだというのに、すこしもつゆのような気がなくて、海水浴にでもいきたいくらいです。わたしたちの先生のお話だと、北海道は夏がくるのがおそいということですが、もう水遊びでもしていますか。

この手紙は

1. 東京の先生から、北海道の先生へ
 2. 東京のこどもから、北海道のこどもへ
 3. 東京の先生から北海道のこどもへ
 4. 北海道のこどもから、東京のこどもへ
 5. 北海道の先生から、東京のこどもへ
- 25 私は船室へおりていって、自分の傷にできるだけのことをした。その傷はずいぶん痛んだし、まだ、どんどん出血していた。しかし深い傷でもなければ危険な傷でもなく、また腕を動かすと、ひどく苦痛だと、いうこともなかった。

その傷は

1. 深い
2. 腕を動かすと、ひどく苦痛である
3. どんどん出血している
4. 危険な傷
5. 痛くない

26

かべ新聞第五号のげんこうを集めます。

- ・記事—作文、詩、わらいばなし、考えもの、研究、ぼくの意見
- ・長さ—げんこう用紙 一枚ぐらい
- ・しめ切り—七月二十五日

七月二十日に、水泳に行ったことを書いたら、げんこう用紙三枚ぐらいに

なりました。

これは

1. しめ切りに間に合わない
2. 長すぎる
3. すぐのせてもらえる
4. 集めている記事に合わない
5. 短かすぎる

27 私は、男の子につかまえさせたあひるを、犬の鼻にすりつけるようにして
さんざんしりをなくってやった

犬は地面に腹をつけ、悲しげな目つきをしていたが、それで、この鳥を追いかけてはならぬということが、よくわかったのだ。以後犬はけって、あひるには、かまわなくなった。

私が犬をしかったのは

1. 私の男の子を追いかけたから
2. あひるをかみころしたから
3. にわとりを追いかけたから
4. 悲しげな目つきをしていたから
5. あひるをおいかけたから

28 みんな大よろこびで、もう一度ねじをまいてうたわせようとしてましたが、王さまはお止めになって「待て、こんどはこちらの鳥の番だ。」とおっしゃいました。ところがそのかごを見ると、中のウグイスは、いつのまにかどこへ行ったのか、かげもかたちもありません。「おやっ。」と王さまもびっくりなさいました。

王様がびっくりしたのは

1. みんな大よろこびをしたから
2. ねじまきのねじがきれたから
3. かごの中がからになっていたから
4. かごの中のウグイスが死んでいたから
5. ねじまきの鳥をお止めになったから

29 太陽がしずむと、あたりは何色ともはっきりいうことのできない色が、つ

ぎつぎとかさなって、夜の色に近くなった。どこからこの色がわきだしてくるのかと見まわしているうちに、大空に一番星がまたたきはじめた。

これは

1. 夜のようす
2. 夕方のようす
3. 夜明けのようす
4. 太陽のようす
5. 雲の色のようす

- 30 「^{あづえ}一枝さん、ただいま。」こういって、お母さんは、息をはずませて帰ってきます。「お帰りなさい。つかれたでしょう。」「一枝さんこそつかれたでしょう。」おたがいに、いたわりながら、夕ごはんのおぜんをかこむのが一日中で、一番たのしいひとときでした。

お母さんは

1. 一枝さんをむかえに行っていた
2. ひっそりとかえってきた
3. 雨にあって、急いで帰って来た
4. おつとめから帰ってきた
5. ゆうごはんを用意した。

第二部 大意

- 1 うしは、えさをやると、すぐたべてしまって、まだほしいので、おけをつのでつつきます。それから、水がほしいときにも、やはりおけをつつつきます。

この文は

1. うしのこと
 2. えさのこと
 3. つののこと
 4. おけのこと
 5. 水のこと
- 2 はたけいちめん、なのはながさいています。もんしろちゅうが、はたけの上を、ひらひらと、とんでいきます。
- むぎぶえを、遠くのはたけで、ふいている子もいます。春のはたけは、ほんとうにのどかです。

この文のあらわしていることは

1. こどものこと
2. おぎぶえのこと
3. 春の花のこと
4. いろいろなちょうちょうのこと
5. 春のはたけのようす

- 3 かいこが、すこしずつ口から糸を出しはじめました。かいこは、白かったけれど、きいろくなって、なんだかすきとおるようになりました。耳をすましていると、こそこそと、まほうつかいのように、まゆをつくっていません。

この文のいいたいことは

1. かいこの口のこと
2. すきとおるようになったこと
3. まゆをつくっていること
4. きいろいかいこのこと
5. 耳をすまして聞いていること

- 4 風はやみましたが、まだ雪がふりつづいているのが、でんとうのあかりで、よくわかります。この雪の中を、四人五人とあつまってきます。ストーブにぬれたぼうしをかわかしている人たちが、だんだんふえてきます。

この文のあらわしていることは

1. 風がやんだこと
2. 人がだんだんあつまってくること
3. ぼうしのこと
4. でんとうがあかるいこと
5. ストーブのこと

- 5 五月四日の夜、私の家には、ほんとうにかなしいことがおこりました。それは、おかあさんが、お使いのかえりに、オートバイにはねられて、頭にけがをして、小川病院に入院したことです。

この文でだいじなことは

1. 私の頭のこと
2. おかあさんのお使いのこと
3. おかあさんのけがのこと
4. オートバイのこと
5. 小川病院のこと

- 6 地しんのため家がつぶれたり、鉄道のせんろがこわれたりしました。なかでも、地しんの中心に近いところでは、死んだ人もあったそうです。たい

へんなひがいをうけました。

この文のいいたいことは

1. 地しんのひがいがあったこと
2. 家がつぶれたこと
3. 鉄道のせんろがこわれたこと
4. みんなにげたこと
5. こちらは地しんがなくてよかったこと

- 7 水は高いところから、低いところへ流れる性質がある。川の流れや、ものすごいたきや、やねから流れおちる雨水や、ダムから走り落ちる水を見てみると、このことがわかる。

この文のとくにいつていることは

1. 雨水のこと
2. 水の性質のこと
3. やねのこと
4. たきのこと
5. 川の流れのこと

- 8 大むかしの人は、えものがなくなれば、つぎつぎにすむ場所をうつしていくことが多かったが、貝ならいつでもとってくることができたから、貝がたくさんとれる海の近くにすんでいた人たちは、何十年も、ときには何百年もお、なじ所に村をつくってすんでいたようだ。

大むかしの人は

1. いつでもすむ場所をかえてばかりいた
2. ちえのたりないものばかりだった
3. えものがなくてこまっていた
4. 貝のとれる海の近くには長くすんでいた
5. 海の近くにはなかなかすまなかった

- 9 けさも山のちやう上には、いおうのガスがふき出ている。むせるようなおいが立ちこめている。きいろいけむりをふきあげている。一本の草もない。

きみのわるい、あくまのこえのようだ。

この文のあらわしていることは

1. 草のないこと
2. 山のいおうガスのこと
3. けさのこと

4. あくまのこえのこと 5. けむりのこと

- 10 まず林を売りました。それから土地を売りました。つぎには、どうぐを手
ばなしました。とうとう家までも売ってしまいました。
それでも彼は、研究をとちゅうでうちきりませんでした。

この文のいいたいことは

1. 家を売ったこと 2. 林を売ったこと 3. どうぐを売ったこと
4. 土地を売ったこと 5. 研究に熱心なこと

- 11 どんな種類の本でも、自分がおもしろいと思えるものを読めばよいので
すが、本の中には、読んでいるときはおもしろくても、読み終ると、「なん
だつまらない。」と、思わせられるものがあります。たとえば、読んでい
るときは、おかしくてげらげらわらったり、あるいはなみだが出てくるよ
うな所があっても、読み終るとたんに、みんなわすれてしまうようなも
のがあります。こういう本は、たいていつまらない本だと思います。

この文のいいたいことは

1. 本はおもしろいのを読めばよい
2. いつまでも心にのこるのがよい本だ
3. なみだの出るような本はつまらない本だ
4. 本は読み終るとつまらなくなるものだ
5. 本は読んでいる時がおもしろいのだ

- 12 私たちは、おとなになると、だんだん専門せんもんの仕事を持つようになります。
そして、どうしても同じ仕事をもっている同士がつき合うことが多くなり
ます。ですから、小学生や中学生の時は、できるだけ大ぜいの友だちをも
ち、いろいろの人とつき合うことがたいせつになってきます。それができ
なければ、時がたつて、その人がもし総理大臣せいりだいじんになったとしても大学教授きようじゆ
になったとしても、けっして国民の気持きつを察することのできる、ほんとう
の指導者にはなれないと思います。

この文のいいたいことは

1. 小学生や中学生は、友だちが大ぜいある
2. 友だちがないと、えらい人になれない
3. いろいろの人とつき合うことがたいせつだ
4. 友だちは、同じ仕事をもっている人がよい
5. 子どもには、友だちはたくさんいらぬ

- 13 私たちは学校へ行ったり、よそへお客になって行くときには、かがみの前で自分の身なりを正します。これは人の前に、きたない着物や、だらしな
いかっこうをみせるのがはずかしいからです。ところが、あんがい、きた
ない文や、だらしな文を、平気で人の前に出しているのは、こまったこ
とです。

この文のだいじなことは

1. 学校へ行くときは身なりを正す
2. かがみにむかうのはたいせつだ
3. お客のときは身なりを正す
4. だらしないかっこうはいけぬ
5. きたない文をかくのはいけぬ

- 14 アメリカ合衆国^{がっしゅうこく}は、最初はイギリスの領土^{りょうど}であって、イギリスの役人が
きておさめていましたが、人民は、イギリス本国の利益や、イギリスの王
様のことばかり主にする役人たちの政治に、しだいにがまんができなくな
り、今から百七十年ばかり前に、とうとう武器をもって立ち上りました。
そして本国の軍隊とたたかってこれを追いはらい、独立して今の合衆国を
作ったのです。

それは、王様や貴族^{きぞく}などというもののない、人民たちだけのほんとうの
新しい国でした。

この文のいっていることは

1. イギリスの人間は悪い人間だ
2. 百七十年前にアメリカで戦争があった

3. アメリカは人民が力を合せて作った国だ
4. アメリカとイギリスはなかが悪い
5. けっして戦争をしてはならない

15 動物園の大きな池に、何びきかのアシカがおもしろそうに泳いでいるのを見ると、いつまでもあきません。えさをやる時間がきて、見物人たちが魚をかって投げてやると、アシカたちは、じょうずにもぐって行っては、たちまちえさをくわえてきます。

せんすい夫や、あまさんたちが、いくら水にもぐるのがうまくても、アシカの足もとにもおよばないでしょう。

この文のいっていることは

1. 動物園にはアシカがいる
2. せんすい夫とアシカが水にもぐる競争をした
3. アシカのえさは魚である
4. アシカは水にもぐるのがうまい
5. 見物人がアシカにえさをやっている

16 火を燃やすことのできるのは、空気の中に酸素のあるおかげです。それは、酸素には、ものの燃えるのを助ける働きがあるからです。

たとえば、よく燃えないときには、うちわであおいで風をおくと、新しい空気がたくさんとどきますので、よく燃えだすことになります。

この文のだいじなことは

1. うちわであおぐと燃えること
2. 火が燃えるのは酸素のためであること
3. 燃えない時の工夫
4. うちわと空気のかんけい
5. 空気の中に酸素のあること

17 ドイツの歴史をふりかえてみると、ドイツ人はなかなかすぐれた民族だということがわかります。医学では、結核菌を発見したコツホ、サルバルサンを発明したエールリッヒ。文芸ではゲーテをはじめとして、数多くの人があります。カントやマルクスもそうです。

音楽ではバッハ、ベートーベン、モーツァルト、シューマン、リスト、メ

ンデルスゾーン、ブラームスなど、みんなドイツ人です。

この文のいっていることは

1. ドイツには、えらい学者がたくさんいる
2. えらい人は、みんなドイツ人である
3. ドイツの歴史はおもしろい
4. ドイツ人はすぐれた民族だ
5. ドイツ人は医学、文芸、音楽にすぐれている

18. むかしからよく「土の下に大きなナマズがいてあばれるから、地しんがあるんだ。」といわれていますが、ほんとうでしゅうか。

「なんだ、ばかばかしい。ナマズは川の中にいるんだよ。」とみなさんは答えるでしゅう。ところが今でも、大ナマズがあばれるんだということを信じているおとなの人たちがいるのです。だから大むかしの人たちが、ナマズがあばれるからといたり、神さまがおこられたのだと思ったとしてもむりもないことです。

この文のいっていることは

1. むかしの人が、地しんは、ナマズがあばれて起きると考えたのは、しかたのたいことだ
2. 神さまがおこると地しんになる
3. むかしはナマズのために、地しんが起った
4. ナマズが、地しんを起こすとはふしぎだ
5. むかしの人はばかだった

19. わたしたちの大すきな本は、紙でつくられ、それには、絵や文字が書いてあります。ところで君たちは、石でできているすばらしい本のあることを知っているでしゅうか。それは、わたしたちの足もとに横たわっている大地なのです。といっても、君たちにはすぐ信じられないかも知れません。だが、大地は、ほんとうにすばらしい本なのです。この石でできた本に

は地球や、生物の生い立ちや歴史が書いてあります。

この文のだいじなことは

1. 絵の本も、石の本もかわりない
2. わたしたちは、本が大すきだ
3. 大地は私たちの足もとにある
4. 本に書いてあることをすぐ信じてはならない
5. 石をしらべると地球や生物の研究ができる

20 八月三日の夜になりました。アンデルセンは急に熱がでて、その晩は、こんこんと眠りつづけていました。

それでも、ときどき目をひらくと、すぐそばにメルヒオール夫人の、母親のようにやさしい、愛情に満ちた顔がほおえんでいました。

明け方近く、もう一度目をさました。その時、夫人は白いばらの花を手にもっていました。

アンデルセンは、しずかに夫人の幸福を祈りました。

この文のいっていることは

1. アンデルセンが、一晩中、病気で苦しんだこと
2. メルヒオール夫人が、一晩中、アンデルセンのかんびょうをしたこと
3. アンデルセンは明け方まで、眠りつづけたこと
4. メルヒオール夫人は、白ばらのように美しいこと
5. メルヒオール夫人が、ほおえんだこと

お や す み

第三部 細 部

1 朝みた時、きのうと同じように、三ばの子つばめは、すから、でたり、は

いったりして、すこしずつとんでいました。

学校から帰って、そとへ出てみたら、三ばの子つばめは、おやつばめにつれられて、でんせんの上に、一れつにとまっています。

朝見たとき、子つばめは

1. でんせんをこえてとんでいた
2. おやつばめにつれられていた
3. すから、かおを出していた
4. すから、でたり、はいったりしてとんでいた
5. すから、おちてしんでいた

- 2 三月といえば、雪国ではまだ雪がのこっているのに、あたたかい地方では、もう、さつまいもや、じゃがいもをうえるじゅんびをします。子どもたちも、石けりをしたり、なわとびをしたりします。

雪国の三月は

1. じゃがいもをうえる
 2. 石けりをしてあそぶ
 3. まだ雪がのこっている
 4. なわとびをしてあそぶ
 5. さつまいもをうえる
- 3 休みはすみました。グレーチェンは、また二週間学校へいかなければなりませんでした。そうしているうちに、ひっこしが目の前に近づいてきました。それがいよいよ次の火曜日ときまって、きょうは、もう土曜日でした。家中とりみだしてあります。まどかけはみんな取りはずされて、室内には、荷造りのつめものに使った残りのほし草や、わらがいっぱいちらばって、じゃましています。

ひっこしするのは

1. 二週間たつと
 2. つぎの土曜日
 3. きょうすぐ
 4. まだきまっていない
 5. つぎの火曜日
- 4 湖には、カモとオシドリがいました。ふたりはなかよしで、いつもいっしょに泳いでいました。

オシドリはたいへん用心深い鳥でした。遠くにりょうしが見えるとすぐ逃げてしまいます。高い空をワシや、タカがとんでいても、すぐかくれてしまいます。

カモトオシドリがいっしょに泳いでいるのは

1. かくれるにつごうがよいから
2. ワシやタカのように空をとべないから
3. 遠くからりょうしがくるから
4. なかよしたから
5. 二羽とも用心深い鳥だから

- 5 たいがいのかんだんけいは、れい下四十度までの数字がついています。それでおしまいになっているのは、水銀すいぎんがそこまで下がると、こおってしまうからです。けれども世界には、そんなに寒くなる場所は、ほとんどありません。世界でいちばん寒いところは、北極にはありません。いちばん寒い、つまりかんだんけいの目盛りが、四十度以下に下がってこおってしまうところは、シベリヤにあります。

れい下四十度以下の寒さになるところは

1. シベリヤ
 2. 北極
 3. 南極
 4. たいがいの土地にある
 5. 地球の上にはない
- 6 遠くの山が雪で白い。山山の上に、はい色の雲がでている。いまに、いやな北風が川上から出てきそうな気がして、むちゅうで、いねをかった。気がつくと、弟がおひるのべんとうをはこんできていた。

急いでいねをかったのは

1. 山に雪がきたから
2. 北風がふいてきそうだから
3. はい色の雲がいやだから
4. 弟がむかえにきたから
5. いねかりのおわりだから

- 7 母と、兄と、ほくの三人で、船から家までいかを運ぶと、弟はいかを洗う水をくんで待っている。ほくは、ひろい板を出して、ほうちゅうをそろえる。母と兄は、家の前へむしろをしいて、そこへいかをあげ、板の上でさ

く。

弟は、それを洗って、たるにあける。ぼくは、それをつってあるなわにかける。

水をくんだり、いかをあらったりするのは

1. 母 2. ぼく 3. 母とぼく 4. 兄とぼく 5. 弟

- 8 金の馬車が、すずをふるわせながら走っていきました。王女さまは、いつものように、すずの音をききつけてから、お城のまどをあけに、立たれることでしょう。馬車がゆれるので、かざりの金の鳥もゆれ、のっている王様の白いひげもふるえます。やがて王女さまには、金の鳥も、王さまの白いひげもみえるでしょう。

王女さまが、まどをあけに立たれるのは

1. 馬車が見えてから 2. 白いひげが見えてから
3. すずの音がきこえてから 4. 金の鳥が見えてから
5. 王さまがよんでから

- 9 夏は、^{たいよう}太陽が、わたくしたちのま上からてらしている。また、夏は、太陽のかんかん^て照るひるまの時間が、一年中でいちばん長く、^{じめん}地面のひえる夜が、いちばんみじかい。それで夏はあついです。

夏のあついのは、たいようがま上から照らしているだけでなく

1. 一年中で一ばん日がみじかいからである 2. たいへんあついでこまる
3. 地面のひえる時間が長いからである 4. みずおよぎができる
5. 太陽のてる時間が、一ばん長いからである

- 10 おそろしい毒へびだった。ひらべったいかま首を立てているのだった。おとうさんは、てっぽうをかまえて、ゆるやかに、一步一步、うしろへさがっていった。おとうさんのからだがかうごくたびに、がらがらへびのかま首は、右に左にゆれていた。そして、たびたびしっぽが、がらがらとなるのであった。

おとうさんは

1. 毒へびに石をなげようとしている
2. 毒へびをふみつけた
3. めずらしい毒へびをながめている
4. そと毒へびに近づいた
5. 毒へびに、てっぽうのねらいをつけた

- 11 魚は、えらがあって、水の中にとけている空気を、すったり、はいたりして、生きていくことができるが、人間にはえらがないから、水の中に入ったら、空気をすったり、はいたりすることができないので、死んでしまう。

人間が水の中で死ぬのは

1. えらがない
 2. 水の中に空気がとけているから
 3. 空気をすったりはいたりするから
 4. およぎがへただから
 5. 水をのめないから
- 12 先生が、「こんどの社会科の時間は、工場でどんなものを作っているか、見学に行きましょう。ほかの組では、教室でべんきょうしているのだから、あそんでいる人のないようにして行ってきましょう。」と、いわれました。

見学するものは

1. あそんでいるところ
 2. 工場で作っているもの
 3. 教室でべんきょうしているところ
 4. 社会科のべんきょう
 5. ほかの組のべんきょう
- 13 イギリスの教育のしごとは、アメリカと同じように、各地方が行っているが、文部省があって、国家もずいぶん力を入れている。
なにしろ伝統を重く見る国なので、いっばんの人々がはいる学校と、特別な人がはいる学校が、はっきりわかれていて、大学まで進む特別な生徒たちは、はじめから大学とつながっている小学校へはいる。

「はじめから大学とつながっている小学校へはいる」のは

1. 伝統を重く見る生徒
2. いっぱんの生徒
3. 大学まで進む生徒
4. アメリカの生徒
5. イギリスの各地方の生徒

- 14 昭和二十一年の秋に、アメリカの鳥類学者オーステン博士が日本にきて、各地をまわって、日本の鳥をしらべました。そして、日本の野鳥の少ないのにおどろき、政府の役人や、鳥類学者と、鳥をまもりふやす相談をした結果、昭和二十二年を第一回としてバードデーという行事を設けることにきめたのです。はじめ四月十日だったのですが、四月はほかにいろいろな行事もあり、また日本の季節からいっても五月の方がふさわしいところから昭和二十五年から、一か月おくらせて、五月十日をバードデーとすることにしました。

五月十日をバードデーとすることになったのは

1. 昭和二十一年
 2. 昭和二十五年
 3. 四月十日
 4. 昭和二十一年の秋
 5. 昭和二十二年
- 15 まわりにずっと白い雪のみねが、いきいき立っていた。小十郎がそのいただきで休んでいたときだ。いきなり、犬が火のついたようにほえだした。小十郎がびっくりしてうしろをみたら、夏に目をつけておいた、あの大きなくまが、両足を立てて、こちらへむかってきたのだ、小十郎は、びっくりしてあとずさりした。くまは、じりじりと小十郎をせめた。

だれが、何を一番早くみつけたのか

1. 小十郎がくまをみつけた
 2. 犬がくまをみつけた
 3. 犬が小十郎をみつけた
 4. くまが犬をみつけた
 5. くまが小十郎と犬をみつけた
- 16 世界中の捕鯨船団が、それらのクジラをもとめて、いさましいクジラ取りの競争を始めます。これが国際捕鯨オリンピックです。
- 日本の捕鯨船団も、はるばると赤道をこえて、日本から一万二千キロはなれている南緯七十度あたりの南極海あたりまで出かけ、ノールウェー、イ

ギリス、オランダ、ソビエト、南アフリカ、パナマなどの捕鯨船団にまじってクジラ取りをします。

捕鯨船団がクジラ取りするのは

1. 南緯七十度あたりの南極海
2. ノールウェー、イギリスなど
3. 日本から東に一万二千キロのところ
4. 北緯七十度あたりの海
5. 赤道のあたり

- 17 エジソンが、十九世紀まで、神わざと思われていた電気を、人間の思うままに使いこなして、光を与え、音楽を楽しませ、七十年あまりの一生のうちに、大小千数百の発明を完成したということは、全く人間にできそうもない業績であるが、とくに自分の発明した文明の利器をちゃんとりっぱに事業としても完成しているのは、まことに偉大な業績であるというべきであろう。

偉大な業績であるといって感心していることは

1. 電気をつかいこなして、光を与えたこと
2. 光を与え、音楽を楽しませてくれたこと
3. 大小千数百の発明をしたということ
4. 神わざのような発明をなしとげたこと
5. 多くの発明をし、それを事業としても完成したこと

- 18 暑い夏があるかと思えば、寒い冬がくるといった季節のできるのは、実は太陽の方に変化があるのではなく、地球が首をかしげて、太陽のまわりを回っているために、夏は地球の頭、つまり北半球の方によけいに日が当り、反対に冬は、地球のあごの方、つまり南半球に多く日が当たるからで、私たちのいる大地から見れば、夏は太陽が頭の上近くから照りつけるので暑く、冬は南の低い空から照らすので、寒いということになります。よく、夏暑いのは、冬より太陽が近いのだという人がありますが、けっしてそんなことはありません。

あつい夏のできるときは

1. 太陽が地球に近づくとき
2. 地球が太陽に近づくとき
3. 太陽が寒くなるとき
4. 地球の回転のぐあい、日がよくあたる時
5. 低い空から日が照らすとき

- 19 それは風のないしずかな、北海道の冬にしては、めずらしくあたたかな晩のことでした。ちよつとでもだまっていると、サッサッとふる雪の音に、思わず耳をすましたくなるような晩でした。そのときちょうど、ヌサトクリじいさんのお話の一つおわったところで、三人のおなじアイヌの子もたちが、まだまじめくさった顔をして、今の話をいろいろと考えこんでいました。

降る雪の音に、思わず耳をかたむけたくするのは

1. ちょうどお話がおわったところだから
2. 風のないしずかな晩だから
3. あたたかい晩だから
4. みんながだまっているから
5. まじめくさって考えこんでいるから

- 20 毎年六月七月のつゆ時や、八、九月の台風の時になると、大水が出てたくさんの人が死んだり、田畑や家が流されたりします。

この原因の一つは、山林があられているために、雨水をしっかりとめることができないからだといわれています。

そのために、日本で受ける損害は金になおすと、三百億円というたいへんな数字だそうです。ですから、まず山に木を植えることです。

それには、三、四月の春の頃がよいので、毎年四月に緑の週間が行われます。

この原因というのは

1. つゆや台風の原因
2. 人が死んで田畑や家が流される原因
3. 大水が出る原因
4. 山に木を植える原因
5. 緑の週間の原因

第四部 主題・推理

- 1 さっきまで、よいお天気だったのに、きゅうに木のはが、さわぎだしたと
思うと、かみなりが近くなり、あたりがすっかりくらくらしました。あち
らでも、こちらでも、ガラガラと雨戸をしめる音がします。

まもなく

1. ゆらだちがやってきます
 2. でんとうがつくでしょう
 3. しゅくだいがおわります
 4. よるになります
 5. おとうさんがかえります
2. げきをするとき、悪い役をする人も、よい役をする人もあるでしょう。
「ぼくは悪い役だからいやだ。」「わたしは、すこししか、せりふをいわな
いからいやよ。」などという人はないだろうと思いますが、いやな役も、
だれかがしなくてはなりませんし、また、そんな役こそ、たいせつだとも
いえましよう。まくをひくことひとつでも、じょうずにひくのと、へたな
のとは、ねうちがまったくちがいます。ですから、どんな役でも力いっ
ぱいやりましよう。おたがいの協きょうりょく力によって、始めてひとつの美しいも
のができあがるのです。

げきをするときには

1. まくをじょうずにひころ
 2. 進んで悪い役を引受けるようにしよう
 3. どんな役でも力を合わせて、いっしょうけんめいにやろう
 4. げきには、悪い役のないシナリオを選ぼう
 5. よい役は、ほかの人にゆずるようにしよう
- 3 人通りのある町を歩いている間、イタリスは、ひとことも口をきかずにい
ましたが、ひっそりした小こ路じへ来ると、道ばたの石の上に、こしをおろし
て、ひたいに手をあてて、うつむいてしまったのです。イタリスは、ひと
りごとのようにいいました。

「もう一円もない。パンはひときれもない。ルミ、おなかがすいたろうね
今夜は食べずにねなければならぬ。せめてねるところだけでもあるとい
いがね。」

その晩二人のねたところは

1. 町はずれの家ののき下
2. あたかいふとんの中
3. 小さなやどや
4. 王様のごてん
5. だいどころ

- 4 みかんをりんごの前においてみました。かさなりぐあいがよくありません
ので、みかんを右がわにうつして、光のかんけいをよくたしかめてから、
えんぴつをとりました。

ならべかえたのは

1. かざりにするため
2. みせにならべるため
3. かごに入れるため
4. シャせいするため
5. シャしんをとるため

- 5 一郎は、母思いのやさしい子でした。しかし野球のすきな元氣者でもあり
ました。ある日、家の前で、お友だちと、こまをまわして遊んでいまし
た。そこへ野球の遊び仲間がさそいに来ました。ちょうどおかあさんも、
おつとめを早あがりして来て、おつかいをたのみました。

一郎は

1. 野球にでかけた
2. おつかいにでかけた
3. 家へ入った
4. こままわしをつづけた
5. お母さんのかたをもんだ

- 6 ふたりは、ポストのかげをのぞいたり、わたしのうちのごみばこをのぞい
たり、むかひの家のかきねをのぞいたり、おおあわてのようだ。
ぼうしをかぶっていない方の子どもは、まるでなきだしそうなかおをして
いた。

このふたりは

1. 犬をさがしている
2. かくれぼしをさがしている
3. 友だちをさがしている
4. ぼうしをさがしている
5. おとうさんにしかられた

7 アイ子さんと、カズ子さんとナオ子さんは、きょうだいです。けれども三人はそれぞれ性質がちがいます。

アイ子さんは、いつでもよくわらいます。カズ子さんは、すぐにふんとおこります。いちばん下のナオ子さんは、すこしなきむしです。

ある晩、三人がいっしょに、おふろにはいりました。小さいナオ子さんがいたずらをして、おねえさんふたりに水をかけました。

カズ子さんはどうしたでしょう

1. 「わあっ、つめたい。」と、いってわらった
2. 「つめたいじゃないの。」と、おこった
3. 「つめたいよう。」と、いってなきだした
4. 「ナオ子は悪い子だ。」と、いってかなしんだ
5. 「いたずらはよそう。」と、やさしく教えた

8 「春子、かどの、やおやさんまで行ってきてちょうだい。」と、おかあさんはやさしくたのみました。「いやなおかあさん、帰るとすぐ用をいいつけたりして。」と、春子はぶつぶついいながら出かけました。春子の出ていったあとに、お客様がお見えになりました。

そんなことをしらずに春子は、あらあらしく帰って来ました。「おかあさん、お野菜よ。もう、あそびに行っていていいでしょう。」と、いうが早いか春子は野菜を台所になげ出しました。

なぜ野菜をなげだしたのでしょうか

1. きらいなお客様だった
2. 野菜がおもかった
3. いやなおつかいだった
4. とおいおつかいだった
5. ものをそまつにする子だから

9 あるとき、ロンドンの町に、もうじゅうの^{みきど}見世物がかかりました。入場料

は、お金でも、犬でも、ねこでもいいということになっていました。犬やねこは、もうじゅうたちがたべるからです。お金をはらえないひとりの男が、どうかして自分もその見世物を見たいと思って、道を歩いていました。すると道ばたに一びきの小犬がすてられていました。

その男はどうしたでしょう

1. 小犬をひろって、見世物を見にはいった
2. しらん顔して歩いていった
3. 小犬をけとばした
4. 小犬を売つて、そのお金で見世物をみた
5. 小犬でなくてお金だったらなあと考えた

- 10 王さまがとてもかわいがっている一わのタカがいました。王さまは、すこしくらいのことで、タカをしかったことはありませんでした。

ある日、王さまは、森にうさぎをとりに行きました。タカは、いつものようにえものをつかまえました。そのうちに王さまは、のどがかわいてきました。きれいな水がたらたらと落ちているところが見つかったので、王さまは、ちゃわんをもってきて、そのしずくをうけました。やっと水がちゃわんにいっぱいになりました。王さまが、口もとにもって行こうとしたとき、急にタカが王さまの手の上ではばたいたので、ちゃわの水がこぼれてしまいました。

王さまはどうしたでしょう

1. タカをしかりつけた
2. タカにちゃわんをなげつけた
3. おこってタカをころしてしまった
4. 森にはいってしまった
5. またちゃわんに水をためはじめた

- 11 かりに、五十円で一さつのざっしができるとします。ふろくをつけなければ、この五十円がそのままざっしの中味なかみのためにつかわれるわけです。ところがふろくをつけるとすると、その費用がいくらかかるわけです。かりに、それを五円とすれば、ざっしの中味には四十五円しか使えないことに

なります。五十円をそのまま使って作ったものと、四十五円しか使えなかったものとは、そのできあがりにおいて、どちらがりっぱであるかという事は、いうまでもありません。

この文はどういうことをいっていますか

1. ふろくの多いほどよい
2. ふろくはつけた方がよい
3. ふろくをつければ、ざっしのできあがりがい
4. ふろくがないと、できあがりがい、よいかわるいかわからない
5. ふろくをつけてもむだである

- 12 自分だけで、ほんとうのことを書いたつもりでいても、それが読む人に正しく受けとられなければ、なんにもならないものです。

自分の作文を読んでもくれる先生や、お家の人や、友だちによくわかってもらえるように書くのです。ところが、それだけではまだたりないのです。同じ土地に住んで、同じようなことを見聞きしている人たちにだけわかったのでは、いけないのです。

ことばのちがう北海道の人にも、九州の友だちにも、よくわかるように書きあらわさなければ、みんなに通じ合わないのです。

よい文とは

1. よその土地の人が読むとわかる文
2. 友だちによくわかる文
3. 自分のほんとうのことを書いた文
4. 世の中のだれにでも通じる文
5. 読む人が感心するような文

- 13 大会の中で、最も人気のあるのは、マラソン競走でした。会場がギリシャなので、見物人の多くはギリシャ人でした。

ところが、どれ一つとして強いのはなく、みんな外国の選手に負けてしまっているので、がっかりしていました。ちょうどその日の競技も終わろうとしていたところです。マラソンの選手が帰ってくるというので、見物人たちは、どこの国の選手が一番かと、だんだんざわがしくなってきました。ギリシャ

人たちは、どうせアメリカだろうなどといっていたのですが、どうでしょう。先頭をきって走って来るのは、ギリシャの選手ではありませんか。

ギリシャの見物人は

1. がっかりした
2. とび上がって喜んだ
3. またかとしらん顔をしていた
4. やっぱりつまらないと思った
5. 負けても最後まで走れと応援した

- 14 毎日の新聞を見てごらん下さい。あなたは必ずたくさんの広告が出ていることに気がつくでしょう。そのたくさんの広告の中で、何と何の広告がとくに目につくでしょうか。広告は、ただやたらに紙面を大きくとればよいというものではありません。

同じ大きさの紙面を使っても、すぐ人の目につくものと、うっかり見のがしてしまうものがあります。見のがされては何にもなりません。たとえ紙面は大きくなくとも、人の注意をひけば、広告の役目はいちおうおわたつわけです。

よい広告とは

1. すぐ人の目につくもの
2. 大きな紙面を使ったもの
3. あまり大きな紙面を使わないもの
4. 毎日の新聞に出ているもの
5. 注意してみるとよくわかるもの

- 15 生きものをかわいがるといふことは、いのちをとうとぶことです。私たちはだれでも自分のいのちをたいせつにします。けれども、自分のいのちだけをたいせつにして、人のことはあまり考えない人も、たまにはあるものです。ほんとうにいのちのたいせつさがはっきりわかれば、自分とおなじように、どんな人のいのちもたいせつであることがよくわかるはずですよ。たとえば、こんな人を見たことはないでしょうか。自分や、自分のおとうさん、おかあさん、きょうだいなどは、とてもだいじにするくせに、自分の家に働いている人たちには、とてもいばったり、いじわるする人があるものです。

この文のいみは

1. 生きものにはいのちがあること
 2. 自分のいのちをたいせつにすること
 3. おとうさん、おかあさんをだいじにすること
 4. うちに働いている人に、いじわるしないこと
 5. どんな人のいのちもたいせつであること
- 16 秋はだんだんすずしくなって、夜が長くなるので、むかしから燈火親しむべき候といわれて、静かに本を読むのにふさわしい時です。みなさんほどんな本がすぎですか。一人一人の顔がちがうように、本にもすぎきらいがあり、ちがっていることでしょう。
- どういう種類のものでも、よい本を選んでよく読み、よく考えたならば、心を養い、知識をひろめ、深めることになります。
- 野球や映画とは別な読書の喜びや楽しみを味わうことができるでしょう。

この文のいみは

1. 読書は野球や映画よりねうちがある
 2. 人によって好きな本がちがう
 3. 本をよく読み、よく考えよう
 4. 本にはいろいろな種類がある
 5. わかしの人は静かに本を読んだものだ
- 17 わいわいさわいでる教室の中へ「お待ちどおさま。」と、いいながら、クラス委員の秋山君と先生がはいて来た。秋山君も先生も、いいあわせたように指の先を黒くしている。「じゃ、文集十一月号を配りますから。」と秋山君がいう後をうけて、「もらったものは帰ってよろしい。」と、先生がいわれた。ワアッと歓声があがった。秋山君の渡す動作がじれったいほどのろまに見えた。文集をもらおうと、すぐ読んだ。

秋山君の動作がのろまに見えたのは

1. 早く文集を読みたいから
2. 早く帰りたいから

3. 秋山君はいつものろまだから
4. ほくならもっと早く配れると思ったから
5. ていねいにわたしているから

18 女王さまがお客をもてなすためにえん会を開きました。お客は女王さまの前でごちそうをいただいて、たいへん固くなっていました。

最後にくだものができました。給仕人は、くだものを出すとき、フィンガーボールに水を入れてもって来ました。これは、くだものをたべたとき、よごれた手をあらうためのものです。ところがお客は、よほど固くなっていたらしく、そのフィンガーボールの水をのんでしまいました。女王さまはそのようすをだまってい見えていましたが、自分もしらん顔をしてフィンガーボールの水を飲んでしまいました。

女王さまがフィンガーボールの水をのんだのは

1. のどがかわいていた
 2. のむ水だということがわかった
 3. うっかりしていた
 4. お客のまねをした
 5. お客にはじをかかせたくないと思った
- 19 一匹のへびを、もう一匹の黒へびが追いかけているのを見かけました。アビードはらくだからおり、黒へびを殺して追いかけられたへびを助けてやりました。

それから、シリアに行って用をすませ、アラビヤに帰る途中、とあるさばくの中で眠ってしまい、目がさめるとらくだがいません。

いつか夜のやみにつつまれ、とほうにくれていますと、とつぜんだれかが声をかけました。

とほうにくれたわけは

1. らくだからおりて黒へびを殺したから
2. さばくの中だから
3. さばくの中にねむってしまったから
4. 夜のさばくにらくだがいなくなったから
5. だれかが声をかけたから

20 「やあい、てんぼう。てんぼうの清作。」清作は、いつも友だちに、そこからかわれるのでした。てんぼう、つまり指のひらかなない棒ぼうのような手だということです。清作は、そういわれても、じっとがまんをして、うつむいていました。なみだをにじませて、帰ってくる清作を見て、そのたびに、「ああ、すまない。あんな手にしてしまったのも、みんなわたしのゆだんから。」と、清作の母は、手を目にやるのでした。

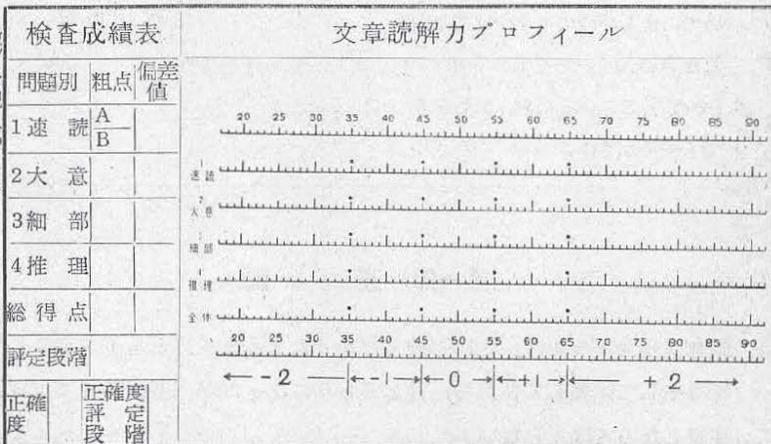
清作の母の泣いたのは

1. 清作が友だちに「てんぼう。」とからかわれるから
2. 清作の指がかたわで、ひらかななかったから
3. 清作がじっとがまんしてうつむいていたから
4. 清作がなみだをにじませて帰ってくるから
5. わたしのゆだんから清作をかたわにしたと思うから

名まえ		男女	所見
学 校	小学校		
学年組	年 組	番	
検査日	昭和 年 月 日		
知能年齢（又は I. Q. 偏差値）			

小学校四、五、六年用
文章読解力テスト

1. 速読のAは正答数、Bは試答数（やった数）を記入のこと



改訂 中学校文章読解力検査

—中学校1・2・3年用—

注 意

1. いつも先生のいう通りにして下さい。
2. 「開け。」といわないのに、開いてはいけません。
3. 「始め。」といってから「やめ。」というまで、正確に、しかもできるだけ、速くやりなさい。
4. 問題は、番号の順にこなさい。しかし、むずかしいのは残して進み時間があったらあとでこなさい。
5. まちがっても、けしゴムは使わないで、えんぴつで×をつけてなおしなさい。
6. 「やめ。」と、いったら、とちゅうでもやめなさい。

練 習

白地に赤い十字をえがいた旗が、病院や町通りにひるがえっているのをよく見かけることがあります。この旗は、博愛と、人道と、平和とをあらわすものであって、戦場でもこの旗をかかげている所には、こらげきを加えることはできません。

- この旗は、
1. 赤十字の旗
 2. 日の丸の旗
 3. 国連の旗
 4. 万国旗
 5. 外国の旗

第一部 速 読

- 1 頭を打ったボールは、さほど強くなかったとみえて、とも子さんはしばらく冷やして休養していたら、もとおりになったが、遊び時間は、お互に注意しなくてはならない。

ともさんは

1. 勉強の時間にまりなげをした
2. ボールをぶつけられた
3. ボールを人にぶつけた
4. ボールを打った
5. 頭をなぐられた

- 2 八月半ばのことでした。ブラットフォームのいすの上に、二匹^{ひき}のまだ目のあかないあわれなねこが「アァア」と悲しそうにはいずりまわりながらときどきよるけては、小さい足でよちよちしていました。

こねこは

1. 二匹とも生まれたばかり
2. おやねこ
3. 一匹はおやねこ、一匹は子ねこ
4. 目だけはもうあいている
5. 一匹は歩くことができる

- 3 まず炭をおこす。炭がおきるまでの間に、昨夜といでおいた米の水加減^{みずかへん}をする。この水加減がたいへんむずかしいのだ。この加減一つで、ご飯がじょうずにたけたり、へたになったりする。

この人は

1. みそしるをつくっている
2. 炭をはこんでいる
3. ご飯をたいている
4. べんとうのおかずをつくっている
5. 米をといでいる

- 4 人形をつかってやる芝居には、直接手にもって動かす「手づかい式」と「糸あやつり式」の二つがあり、日本にも早くからありました。そしてもとをたずねると、中央アジア方面から、中国と朝鮮^{ちようせん}を通過して伝わってきたのです。

人形芝居のものは

1. 中央アジア方面
2. 日本
3. 朝鮮
4. 中国
5. ヨーロッパ

- 5 畑は広がったが、りんご、かき、すももなどが、あちこちに作ってあった。ことに、あんずの木が多かった。わか葉のかげに、よくうれた美しいだいたい色とくれないをまぜたあんずが、葉もれの光にやわらかく、おい

しそうにかがやいていた。

やわらかく、おいしそうなのは

1. りんご 2. かき 3. すもも 4. あんず 5. わか葉

- 6 ぼくたちはおじさんのうちのまどから、ぶるぶるふるえながら、自分の家の焼けるのを見て夜を明かした。おじさんが、びしよりぬれて、どろだらけになって帰って来た。そして、「家は焼けたが、はなれだけは残った。おとうさんも、おかあさんも、みんなけがはなかった。」といった。

焼けたのは

1. おじさんの家 2. ぼくの家 3. はなれ 4. 近所の家 5. 遠くの家

- 7 長いかげを地にひいて、かれはだまりこくって歩いた。着物はうすかった。西風が吹いてくる。寒い風だ。草原の道が国道に続くところまできたころには、日がくれてしまった。物のかたちがまるみを帯びずに、かたいままで黒ずんでいく。こちんとした晩秋の夜がきた。

こちんとした晩秋の夜を、彼は

1. あたたかい夜だと感じた 2. うれしい夜だと感じた
3. さわがしい夜だと感じた 4. 寒くてさびしい夜だと感じた
5. 明かるい夜だと感じた

- 8 ぼくは、夏休みに、ちょうの標本^{ひょうぼん}を作りたいと思って、いっしょうけんめい採集^{さいしゅう}した。ある日、カンナの花の上でクロアゲハをとった。つづいてしゃくしゃくの花にとまったキアゲハ^{あひ}を網ですくった。こんどは、にらの花のところ、イチモンジセセリが見つかった。はぜの木の下で、オオミズアオガをとった。

カンナの花の上でとったのは

1. キアゲハ 2. クロアゲハ 3. イチモンジセセリ
4. オオミズアオガ 5. モンシロチョウ

- 9 自分はある日、朝早く川岸に出た。すんだ川の流れば岩にぶつかり、あわをたててながれている。その岸の岩の上に自分は立った。自分は顔を洗

い、うがいをした。

川の水は

1. きたなくて、流れがはやい
2. にごっているが、流れは早くない
3. すんでいて流れがはやい
4. すんでいるが、流れは早くない
5. すんでいて深い

- 10 おうえん 応援団のなかから、応援歌がながれてきた。私はいっしょけんめいたたくに戦った。田中さんのみごとなタツチでまた一点。「M校二十一対A校十一。」
「M校の勝。」「わあー。」と、あがる歓声をききながら、私たち選手も手をとりあって喜んだ。

私は

1. M校の選手
2. M校の応援団
3. A校の応援団
4. A校の選手
5. 試合の見物人

- 11 エドモンドが、その妹といっしょに、いすの上に立ちあがって、ハンカチをふっています。チェリーはポケットをさがしてみました。前の日に学校の小使さんからもらった、ボンボンの入った紙袋かみぶくろしかみつきりません。そこで紙袋をふりました。

紙袋をふったのは

1. エドモンド
2. チェリー
3. エドモンドの妹
4. 小使さん
5. チェリーの妹

- 12 ちょうはどんなどころにいるのだろうか。学校の花だんには、松葉ぼたんや、ほうせん花が咲いているが、少しも飛んで来ない。飛んでくるのかも知れないが、見たことがない。ぼくの家にだって、カンナの花が咲いているし、百日草だつて、とてもきれいだ。それなのに、ぼくの家の花にも飛んで来ない。

学校の花だんに咲いているのは

1. ほうせん花とカンナの花
2. 松葉ぼたんと百日草
3. 松葉ぼたんとほうせん花
4. カンナの花と百日草
5. ほうせん花としゃくやくの花

- 13 卵を十三日めに破った。理科室じゅうが^{りゅうかすいそ}硫化水素のにおいで、いっぱいになり、実験をしていた下級生からもんくをいわれた。^{ふばい}腐敗してから何日もたったためか、全体が草色をした、どろどろ状で、^{しぼう}脂肪もなにもわからなかった。

この卵は

1. まだ腐敗していない
2. 腐敗だけはわかった
3. けさ腐敗したばかりだ
4. すっかり腐敗している
5. まもなく腐敗しようとしている

- 14 ノーベル氏はとてもやさしく、父母に忠実な人でした。毎日いそがしい日を送つていても、母の^{たんじょうび}誕生日にはわざわざ帰って来てそのお祝いをするのを楽しみにしていたそうです。また世の中に困っている人があれば、自分の収入をすべて与えこることもありました。

この文は

1. ノーベル氏の父母のこと
2. ノーベル氏のいそがしかったこと
3. ノーベル氏のやさしかったこと
4. 世の中の困っている人のこと
5. ノーベル氏の収入のこと

- 15 「かめさんは、のろのろ歩いて、とうてい、うさぎさんの敵ではありません。」という話なら、「さあ、かめさんはどうしたでしょうね。かめさんは、よちよちのろのろでかけました。うさぎさんにはとても勝てませんね。」というように言ったら、生き生きしてくるし、聞き手にもよくわかる。

この文でいっていることは

1. 話のしかた
2. 人形芝居のつくりかた
3. 紙芝居のつくりかた
4. 童話のききかた
5. 童話のよみかた

- 16 あの静かな子供の日の遊びを心からなつかしく思う。そのうちでも楽しいのは夕方の遊びであった。ことに夏のはじめなど、あかあかと夕ばえの雲になごりをとどめて暮れてゆくのを見ながら、もうじき帰らなければと思

えば、残りおしくなって子どもたちはいっそう遊びにふける。

この文でいいたいことは

1. 夏の夕方の空
2. 夏のはじめの景色
3. 子どものころの遊びの思い出
4. 夕ばえの雲
5. 子どものわわいらしさ

- 17 つちの音が静かな村里に響きわたる。稲田にはつよい日光がきらざりとさして、たんぼは暑さに眠っているように見える。そこへ、らお屋がひとり来て、おけ屋のそばへ荷をおろす。古い洋服に、腰から下はももひき、きゃはんで、わらじをはいている。

この文の季節は

1. 盛夏
 2. 晩春
 3. 初冬
 4. 早春
 5. 秋
- 18 劇の脚本は、「うた」からはじまつたようです。「うた」を作るのはもちろん詩人たちです。すると詩人が詩をうたいはじめ、それにだんだん劇的構成がもりこまれてきて「劇詩」となり、さらに今日でいわれる劇脚本となったものではないでしょうか。この説には、たしかな根拠もあるので

「この説」というのは

1. 詩人のできるまで
 2. 劇詩のできるまで
 3. 詩のできるまで
 4. 「うた」のできるまで
 5. 劇脚本のできるまで
- 19 林はひっそりと静まり返っていた。釈迦ひとり何か考えながら、静かに林の中を歩いていた。目蓮は釈迦をさがしに来て見つけた。目蓮は心配にたえかねていた。
- 考えながら歩いていたのは
1. 目蓮
 2. ひとりの人
 3. 釈迦
 4. 心配している人
 5. きこり
- 20 学校からならんで、すもう場へ行った。先生の注意があつて始まった。ぼくはさいしょ松永君と組んで勝った。ついに四人のこつて準決勝だ。残ったのは、森本君と川辺君、ぼくと昌義ちゃんだ。森本君と川辺君は、川辺

君が勝った。ぼくは昌義ちゃんと主ひょうの上でにらみあった。そして昌義ちゃんのバンドをもっておし出した。さあ、いよいよ決勝だ。

決勝戦は

1. 松永君と川辺君
2. 川辺君とぼく
3. 森本君と昌義ちゃん
4. 昌義ちゃんと川辺君
5. ぼくと松永君

- 21 から風が幾日も吹きぬいたあげくに、雲が青空をかきみだしはじめた。みぞれと日の光とが追いつ追われつして、やがてどこからともなく雪がふるようになった。

雪が降ったのは

1. から風のやまないうち
2. 雲とみぞれが空をかきみだした後
3. から風がみぞれと共にやってきた後
4. 雲と日光が追いつ追われつした後
5. みぞれと日光が追いつ、追われつした後

- 22 この小さいなか町の中を流れる犀川さいがわはかなり大きな川です。その川に、古風な鉄橋てつきょうがかかっています。橋のたもとには、丸屋根のあるむかし風なレンガの洋館、そして手前にはかわらぶきの、なんとなく暗い気分のする、いくむねかのむかしながらの家がたっています。

この町は

1. 川のある大きな町
2. むかし風な町
3. ごちゃごちゃした町
4. レンガ建の洋館の多い町
5. 鉄橋の多い町

- 23 雑誌「A」の評判がすばらしくよい。ことに山野の「顔」の評判がいい。俺おれはなるべく新聞の文芸欄は見まいとした。「A」が評判されるのがしゃくだからである。が、なんとなく、「A」の評判が気になってしかたがない。俺は白状はくじょうするが、もう三日ばかり続けて図書館に通った。「A」の評判を読むためである。

作品「顔」は

1. 雑誌「A」にのっている
2. 山野の作品ではない
3. 評判がわるい
4. 新聞の文芸欄には悪評がある

5. 雑誌「A」にはのっていない

- 24 ぼたんはまだ満開とは言えなかったが、かえって見ごろであった。十株ほど手入れがよくいって、美を競^かっていた。思いきって大きな花を咲かせる。色とりどりで、一重あり、八重あり、もっと複雑なのがある。

ぼたんの花は

1. つぼみの頃が見ごろである
 2. 大きな花もあり、小さな花もある
 3. 一重か、八重が美しい
 4. 満開のときが一番見ごろである
 5. 満開の近くが見ごろである
- 25 どの子どもも一種の役者だ。わたしという見物人がそこに立ってながめていると、かれらはいっそう調子づいた。これみよがしに、あぶない石垣の上に登るのもあれば「けがしるぞ。」と、下において呼ぶものもある。その中で、からだの小さな子どもに、いくつになるかと聞いてみた。「おら、五つ。」と、その子どもが答えた。

わたしは

1. 調子づいている
 2. 遊んでいる子どもの一人である
 3. ながめている
 4. 石がきの上へのぼった
 5. 五つになる子どもである
- 26 ほんとうに賢治^{けんじ}が歌らしい歌を作りはじめ、ノートに記録^{きらく}しはじめたのは明治四十四年、盛岡中学三年生、十六才の時からである。そして、この時の作品は、「行」をわけて三行に書いてあるのである。この明治四十四年一月からはじまった作歌は、以後大正九年まで熱心に続けられた。

宮沢賢治は

1. 歌を大正九年から作った
 2. 明治四十四年に作歌をやめた
 3. 歌を十六才の時はじめて作った
 4. 歌らしい歌を作ったのは十六才のとき
 5. 歌は十六才まで全く作れなかった
- 27 物ごとは約束^{やくそく}から始まる。俳句は、季題をもちこんだ十七字の詩形をとっている。俳句の季題を無視した短詩形はいくらでも作ることができる。のみならず、それはりっぱな詩でもあり得る。しかし、それはもうけっして

俳句ではない。

この文の要点は

1. 十七字の詩形はみなすくれている
2. 季題をもてば俳句といえる
3. 俳句の約束を守らぬものは俳句でない
4. 十七字の詩形をもっていれば俳句である
5. 俳句はりっぱな詩である

28 ぼくは、せみの顔なほくの素朴さがすきである。せみの顔はまぬけていて非常にかなしげだ。悲しみがこおりついて固まり、カブトのように鉄と銅とチョコレート色にぬられている。いなかひゃくしょうさんがいるように、樹木にせみがいて、それがみな善良そうな顔つきをしている。

1. せみの顔つきは、善良そうだ
2. せみの顔はチョコレート色だ
3. せみはまぬけた顔つきをしてへんだ
4. ぼくはせみの顔を見ていると悲しくなる
5. ひゃくしょうさんをみると、せみを思い出す

29 文学者の仕事は一時的こうかの効果さえ上げればいいという仕事ではない。何年たっても、何度よんでも、ますます感心しないではいられないようなものを書くことが必要なのである。だから文学者の苦心は、全精神をこめて、作品をつくることなのだ。自分の人格を全部たたきこんだ作品をつくることことが必要なのだ。

この文は

1. 文学についての定義を書いている
2. 「文学者は、一時的な効果をあげよ。」と書いている
3. 文学者の人格について書いてある
4. 文学者の仕事について書いてある
5. 文学者のなりたちについてのべている

30 暖かい水蒸気じようけが大地からのぼって、その中に水仙すいせんの黄色い花があざやかに

浮かび上がって見える。えん先の陽の光を浴びながら、この頃になると、私は自分の半生に経験したさまざまな春を思い出す。幼年の頃、少年の頃、青年時代のこと、この数年のこと、そういう時分に記憶にとどまっている春の姿を比較するとともにしに回想するのである。

この文の作者は

1. 少年
2. 青年
3. 幼年
4. 学生
5. 壮年か老人

第二部 大意

- 1 けさおきてみると、夜なかからふりだした雪のために、道も屋根もすっかり雪におおわれた。庭の石どろろも、冬がこいをした木も、雪の下だ。

この文でいいたいことは

1. きのう雪がふったこと
2. けさは雪がつもったこと
3. 道が雪でおおわれたこと
4. 庭の石どろろのこと
5. 冬がこいをした木のこと

- 2 あつい夏に、えびがにをかいました。かにや、めだかは、とくに死にましたが、えびがにだけは、まだ生きています。けれども夏の頃のよう元気はありません。いつもまるくなっています。来年の夏まで生かしておきたいと思って、ときどきえさをやりますが、たべたようすは見えません。冬はねてばかりいるのでしょうか。

この文は

1. かにをかったこと
2. めだかをかったこと
3. えびがにをかったこと
4. 夏の遊びのこと
5. えさのこと

- 3 南極地方で一番有名な生物は、ペンギンです。もっともペンギンは、南極大陸だけでなく、南アフリカ、南アメリカ、南オーストラリア、ニュージーランドなどの南端にも住んでいます。南極が長い夜に入ると、その半年の間、ペンギンは雪の間にうずもれて眠ります。また、ペンギンが卵を産む

時は、なかなかたいへんです。

この短い文に、題をつけるとすれば

1. 冬ごもり
2. 南極の夜
3. 世界の南の国々
4. ペンギンの話
5. 南極大陸

- 4 おじいさんは、せかせかとあるきました。そしてばかげて遠いたんぼ道をはげしくののしりました。ほんとおじいさんは、何年もかよい続けた道を、こんなに遠いと思ったのは、生まれてはじめてでした。

おじいさんは

1. 道にまよった
2. 田んぼで、草をとっている
3. けんかをしている
4. のんびりと歩いている
5. いそいで歩いている

- 5 日本で一番古い歴史の本として、あなた方もよく知っている、古事記や日本書紀は、八世紀のころになって、むかしからのいいつたえや、宮中をはじめ勢力のあった家家で書かれた記録などを、まとめて整理してできたものです。なかには、中国の本にある記事が、そのまま日本にあったこととして引いてあることもあるそうです。

この文は

1. 古事記や日本書紀の説明
2. いいつたえや記録はだいじだということ
3. 日本は古い国であること
4. 古い歴史は、あてにならないということ
5. 中国の歴史の本の説明

- 6 この書物は音楽家ベートーベンの生いたちから死ぬまでの苦しみと、喜びを書いたものである。小学生にもわかるやさしい会話の多い文章で、まとまりよく書いてある。ベートーベンの音楽への情熱についてももう少し書いたらとも思えるが、こども向けの書物としてよくできている。

この文は、何について書いたものか

1. ベートーベンの書いた本についての解説
2. ベートーベンの偉さについての説明
3. ベートーベンの事を書いた本の批評

4. ベートーベンをえがいた絵についての批評
5. ベートーベンの音楽への情熱についての説明

7 うまおいは毎夜、かれのランプを訪問した。かれははじめ、この虫がどうしてランプの光をしたって来るのか、そのかさをぐるぐるとまわるのかわからなかった。しかし、みているうちにすぐわかった。それはけっしてその虫のこのみや、ものずきからではなかった。この虫の来るのは、ランプにたかっている、さらに小さいほかの虫をくうためであった。

うまおい虫は

1. 光をしたってランプを訪問した
 2. 小さい虫を食うためにランプを訪問した
 3. どうしてランプのまわりをまわるのかわからない
 4. 虫のこのみでランプのかさをまわった
 5. 明かるい光がすきでランプを訪問した
- 8 リビングストーンは、二十六才の時、南アフリカにわたりましたが、そのころのアフリカは、まだ開けていなかったもので、土人たちは、悪い人のため、どれいとして、ひどい目にあっていました。リビングストーンはこれを見て、キリストの教えをひろめて、土人たちをすくわねばならないと思いました。

これは

1. リビングストーンの話
 2. 土人の話
 3. 悪い人の話
 4. どれいの話
 5. キリストの話
- 9 「われは、もう帰んな。おれたちは、きょうは向こうどまりだから。」「あんまり帰りがおそくなると、われの家でも心配するぞら。」良平は一瞬あけにとられた。もうかれこれ暗くなること。去年の暮、母と岩村まで来たが、きょうの道はその三、四倍あること。それを今からたった一人歩いて帰らなければならないこと。——そういうことが、一時にわかったのである。良平はほとんど泣きそうになった。が、泣いてもしかたがないと思った。泣いている場合ではないと思った。かれは若い土工に、とってつけ

たようなおじぎをすると、どンドン線路づたいに走り出した。

この文の主人公である良平は

1. 土工といっしょに帰った
2. 土工にしかられた
3. 走り始めたのは真昼時である
4. 岩村までの道の三、四倍も帰らねばならぬ
5. 一人で帰れなくて泣いている

- 10 ヘルマン＝ヘッセは、一八七七年生まれだから、いわば老大家である。が、彼の態度のどこにも、老大家などといったむずかしい感じを与えるものはなかった。翌日昼食をよばれたとき、彼は私が町から買って来たものを紙袋かみぶくろのまま出すのに、なんのこだわりも感じなかった。受け取ったヘッセも、子どものように紙袋の中をのぞきこんで、にこにこ笑いながら、「ありがとう。」と、私の手をにぎるのであった。私は多年作品を通じて親しんできた彼のそぼくさに直接ふれて、限りないなつかしさを感じた。

この文の要点は

1. ヘッセは文豪ぶんこうであるということ
 2. ヘッセはむずかしい人であるということ
 3. ヘッセの作品のこと
 4. ヘッセと昼食をともにしたということ
 5. ヘッセにそぼくさがあったなつかしかったということ
- 11 本ほんに傍線ぼうせんを引き、あるいは欄外らんがいに書入れをするということも、読んだものを心に留めさせる方法である。これをきらう人もあるが私はそれをするほうである。後になって取り出してみると、まったく忘れてしまっていることもあるし、また、さまざまの事を思い出すこともあるが、いずれにしても、読書の感興はこれによって幾倍にか深められる。種々の感想や批評の書き入れてあるのを見ると、まったくわがものにした本だという感じがする。欄外らんがいの書入れのおもしろいのは、夏目漱石なつめしゆくせきのそれである。
- 「夏目漱石のそれである」のそれそれというのは

1. 漱石の書物
2. 漱石の書物への書入れ
3. 漱石の感想
4. 漱石の創作
5. 漱石の人生観

12 人形の古いものには「はにわ」といって、死んだ人の^{たましい}魂をなくさめるために、いっしょにうずめたものがあり、また一千年ほど前の平安時代には、人形を赤んぼうのそばにねせておくと、喜んでながめるばかりでなく、悪い病気にかからないとされていました。つまり、もとはおもちゃより、守り神様としてたいせつにされていたのです。それがだんだんかわいいおもちゃの人形やおひなさまになったのです。

この文の要点は

1. 平安時代の人形のこと
2. おひなさまのこと
3. 人形のはじまりについて
4. はにわのこと
5. 人形のたいせつなこと

13 食べ物をたくわえるという知識は、食料としてありの卵をさがしているうちに、ありの習性から学びとったのではなかろうか。モズが木の小枝に、カエルやトカゲを^き刺して作ったモズのイケニ^{ひもの}は、魚の乾物を作り出すヒントを与えたに違いない。人間の歴史で、狩猟時代の人間が、食べ物をくさらせずたくわえる手段として、最初に考えついたのは^{えんぞう}塩蔵であるという。これも、おそらく、自然にできたものを、お手本にしたのだろう。

この文の要点は

1. ^{ひもの}乾物の作り方
2. 食物の^{ちよぞう}貯蔵
3. 人間の食生活
4. 自然と食料
5. ^{えんぞう}塩蔵の歴史

14 コスモスという花は、一度植えると、それから後数年間は、毎年ひとりで生えてくる。ことしも三四本出た。私の背たけ程のびたが、いっこうにまだ花が出そうにもない。けさ行ってみると、枝の先端に「あり」が二三びきずつ付いていて、何かしら仕事をしている。よく見るとなんだか、つぼみらしいものが少し見えるようである。コスモスの高さはアリの身長の数百倍である。人間に対する数千尺にあたるわけである。どうしてありがこの高い茎の頂上につぼみのできたことをかぎつけるかが不思議である。

作者のいいたいことは

1. コスモスについて
2. アリについて
3. アリの不思議な本能について
4. コスモスの茎の高さについて
5. コスモスとアリの関係について

- 15 視覚がなくては物が見えないように、たとえば美の感覚がなければ美しさは感得できません。どんな芸術品でも美の感覚のないものにとっては、一個の物品にすぎません。芸術品を代価の高いゆえにのみ尊重している人は、ただの物品を尊重しているわけでありませぬ。道徳についても同様であつて、道徳感覚が低級であれば道徳はわかりませぬ。そういう人にはけつして高貴な心情というものは会得できません。

この文の要点は

1. 視覚がなくては物は見えない
2. 代価の高い芸術品でないとな値はない
3. 一個の物品は芸術品である
4. 物品を尊重することはつまらないことだ
5. 美の感覚や道徳感覚が大切である

- 16 芭蕉は考えたのである。自分は最小限度のつましい生活をして、足ることを知る。これは佗びの生活である。昔のすぐれた文学者は、たいいてい佗びの生活をした。宗祇そうぎでも、西行さいぎやうでも、能因のういんでもそうだ。自分はこうした古人にならいたいと思ふ。かような古人に学ぶことによつて、古人が参入実証したところの自然の精魂というものに探り入れ、それを自分のことばとして歌いたい。それが自分の文学の道である。

芭蕉の考えた自分の文学の道というのは、

1. 宗祇、西行、能因の歌をそのまままねる
2. 最小限度のつましい生活をする
3. 自然にとけこみ自分のことばで作歌する
4. 生涯せいがいをさびしく送る
5. 古人を大いに批判していく

- 17 何を読むべきか、いかに読むべきか。むろん、ぜひ良書を選んでそれを精読しなければならぬ。それは本期として誰も異論のないことであるが、それと同時に私は、ある程度までは多く読むということも、やはり必要であ

ると思う。何が良書であるか、又如何にして理解力と批判力とをもってこれを讀むかというに、その良否を鑑別し、また讀んだものを理解し、批判する力そのものは、やはり読書それ自身によって自然にこれを養うよりほかはない。即ち、良書は何かと、それを苦勞してその選択に手間とっているよりは、まず退いて読めというのが實際的な指示であろう。

この文でいいたいことは

1. 本はくりかえし、くわしく読まなければならない
 2. 良書を選んで読め
 3. 多読は必要である
 4. 批判力は読書によって養われるものである
 5. 良書を精読せよ
- 18 人間は何でも知っている。専門専門でどれ程人間が進んでいるか、その程度はその専門以外の人間にはとうていわからないくらいに進んでいる。ところが人間全体の幸福ということに対しては、これまた驚くべく人間は無知である。だから人間は全体的に少しも幸福にならず、ますます不幸になりそうな予感が多分にする。このままでは滅亡^{めつぼう}にまで、ことさら進みつつあるような感がする。人類は人類のために知識の過多を清算すべきだ。人類の幸福に必要な以上の知識は、人類を不幸にするばかりである。

この文でいいたいことは

1. 人間はなんでも知っていること
 2. 知識の過多は、人間を不幸にすること
 3. 人間は無知であること
 4. 人間は専門については進んでいること
 5. 人間は不幸であること
- 19 かけすは、おうむにくらべると、ずっと声にやわらか味があって美しい。私はけっして教えないのであるが、かけすのほうで、ひとりでおぼえるのである。いったん覚えこんだらわすれぬらしい。家にはほかにひよどりが一羽いるが、そのさけぶような声は、どちらがほんもののひよどりかわからないほどうまくなえ声をする。

この文の要点は

1. かけすはまね声がうまいこと
2. おろむはまね声がうまいこと
3. ひよどりはまね声がうまいこと
4. おろむはかけすよりまね声がうまいこと
5. かけすの声はやわらか味があって美しいこと

20 ある皮肉なイギリス人が言ったことらしい。話はドイツのなかのことである。二つの門がならんで立っていた。第一の門には「天国への入口」と書いてあった。隣りのもう一つの門には「天国に関する講演会への入口」とあった。ところがすべてのドイツ人が、最初の門をくぐるうとせず、この第二の門へと殺到したというのである。これはドイツ人の性格というか、物の考え方というか、それを風刺していることはいうまでもない。この話によるとドイツ人は、本物の天国よりは ということになるのである。

にあてはまるのは

1. 死を恐れている
2. 天国に生きることにあこがれている
3. 天国に関する理屈の方が好きだ
4. 死の恐怖を討論でまぎらわす
5. 天国などは信じない

第三部 細 部

1 ベンは、まもなく、ジョージ・ブランヴェルの学校に入学させられました。読みかきのじょうずなベンは、どうも算術は不得意で、なかなかうまくなりませんでしたが、いっしょうけんめい勉強しました。

ベンは

1. 読み書きも算術も得意だった
2. 読み書きは得意だが、算術はへただった
3. 読み書きはへただが、算術は得意だった
4. 読み書きも算術もともに不得意だった
5. 読み書きはへただが、勉強した

- 2 当番が終って、カズ子さんや、サチ子さんと一しょに帰って来た。「三人とも同じ色のオーバーを着ているわ。」と、うれしそうにサチ子さんがいった。「そうね、みんな赤ね。」と、カズ子さんが、私のオーバーを見ながら言った。私はハッとした。私のオーバーは少しみじかくて、おふるだ。

私のオーバーの色は

1. 赤い色をしている
 2. カズ子さんやサチ子さんのとちがう
 3. カズ子さんのとだけおなじい
 4. サチ子さんのとだけおなじい
 5. 二人よりこい色をしている
- 3 正夫君は、まるい窓ガラスに顔をつけて、おかあさんたちに向かって、ぼうしをふりました。となりにいるおとうさんもこにこして、ハンカチをふっています。きゅうに勢いよくプロペラががいてんして、だんだん見送りの人たちのすがたが小さくなっていきます。おじさんも、姉さんも、もう豆つぶのようです。

飛行機にのっているのは

1. 正夫君だけ
 2. 正夫君とおとうさん
 3. おとうさんとおかあさん
 4. おじさんと姉さん
 5. おとうさんだけ
- 4 むかしから、このボレヴァの村では、たいへんみごとな、くじゃく石がとれました。村の工場では、この石をこつこつけずって、いろいろなものをこしらえていましたが、どれもこれもびっくりするほどすばらしい細工でした。その頃この村にプロコーピイチが住んでいました。石の細工にかけては村一番のうでまえて、だれもかなう人はありません。しかし、もうだいぶ年よりでした。

プロコーピイチとは

1. ボレヴァ村でとれる石の名まえ
2. 工場の名まえ
3. 石細工のうまい老人
4. 石細工を職業とする人人
5. くじゃく石でつくった細工もの

- 5 きょう宗教学校から、かえってきたばかりのふたりのむすこは、やすむひまもなく、きょうはコサックの本營に入隊することになった。母親のなげきはかえりみず、父のブーリバは、早くむすこたちをつれて、出発しようとして、せきたてるのであった。

出発するのは

1. むすこと父親の三人
 2. ふたりのむすこだけ
 3. 母親と父親の二人
 4. 家族そろって
 5. むすこと母親の三人
- 6 おとうさんのいなかでは、どこの家でも板で屋根をふいて、風や雨を防ぐために大きな石がならべられて屋根の上のせてあります。なんとその石をのせた板屋根は山の中のすまいらしいでしょう。山には大きな、ひのきの林もありますから、その厚いひのきの皮を板のかわりにして、小屋の屋根などをふくこともあります。雪がくればさういうお家の屋根もうまってしまう、畑も白くなり、竹やぶもねたようになってしまいます。すずめだけが元気に雪といっしょにおどって歩きます。

山の中のすまいらしいものは

1. 小屋の屋根
 2. ひのきの林
 3. すずめの元気なおどり
 4. 石をのせた板屋根
 5. ねたような竹やぶ
- 7 ミツバチヤクマバチはすどい針をもっていて、どんな皮ふのかたい動物でも攻撃するので、大変おそれられている。とくにクマバチの集団攻撃にあつたら こうらに身をかくしたカメのほかは、たすかるものがないだろう。ところが、このクマバチをたべる動物がいるからふしぎなものだ。それはアフリカのラテルである。ラテルはアナグマの一種だが、日本のアナグマより大きい。

クマバチをたべるものは

1. 皮ふのかたい動物
 2. カメ
 3. アフリカのラテル
 4. 日本のアナグマ
 5. 針をもった動物
- 8 ヘデインのしらべたところによると、タクラマカンの^{さびく}砂漠は、一年に五〇

メートルも東から西へすすむ。だからりっぱな都市がいつのまにか砂にうずまってしまったりする。タクラマカンの砂漠は、デッケン・デッカンのもいい、これは千一のみやこともいう意味で、つまりそこにたくさんの都がうずまつているとむかしは信じられていた。

デッケン・デツカンという意味は

1. りっぱな都ということ
2. 千一のみやことということ
3. すずむ砂漠ということ
4. タクラマカンの都ということ
5. 広い砂漠ということ

- 9 ある日木の幹みぎを見ると、ありに似た、ありより大きい虫が、口の附近から白いねばねばした液を出して、木の幹につけていた。見ていると、虫は木の幹の皮のわれ目へ入ってしまった。しばらくして、ありが三匹きて、白い液を見つけておのおのが口にくわえて持って行こうとした。その時一匹のありは歩みがのろくなり、ついに動かなくなった。

木の幹のわれ目へ入ったのは

1. 三匹のあり
2. うごかなくなったありのほかの二匹
3. ありに似た、ありより大きい虫
4. 一匹のあり
5. 白い液をくわえたあり

- 10 思想家として世界に有名な人物は、ぼくたちと、どこがちがったところがありますが、全然別の人間ではありません。そして、ぼくたちは、なかなか思想家にはなれないような気がします。そんなことはありません。彼等はみな真実を求めた人ですが、ぼくたちも真実を求めることはもうすでにやっていることで、その意味ではみんな思想家です。しかし真実に対する情熱がどこまで燃えつづけるか、それが思想家と、ふつうの人間とのちがいになってきます。

思想家とふつうの人間とのちがいは

1. ほとんどちがいがいない
2. 世界的に有名であるかどうかにある
3. ふつうの人間はなかなか思想家になれないことにある
4. 真実を求めつづけるかどうかにある

5. 真実を求めるかどうかにある

- 11 非業^{ひごう}の死と聞いた時、おいはぎのために殺された旅人の死体ではあるまいかと思つて、市九郎は過去のおのれの悪業を今さらのように思い起し、身うちにわき上つて来る悔恨^{かいこん}の心に両足のすくむのをおぼえた。「見れば死人のようじゃが、ところどころ皮肉^{ひにく}の破れているのはどうしたわけじゃ。」と、仏門に入り各地各所で世人のためにつくしてきながらも、今なお、良心にせめられている市九郎は、おそろおそろたずねた。

市九郎はなぜおそろおそろたずねたのか

1. 仏門にある身だから
 2. 知らない旅先で、はじめての人にきくのだから
 3. 水死人が気味わるいから
 4. 水死人がかわいそうでならないから
 5. 過去の自分の行いを悔いているから
- 12 「現代の日本に、世界に誇れるものがすくなくとも二つはある。一つは、わが国のもつ、すぐれた古美術品で、もう一つはその自然の美しさだ。」と、私はよく人に言う。さがしだしたら他にも世界に誇れるものが、まだあるかもしれないが、ちょっと考え出せない。

「その自然の美しさだ」の「その」はなにをさすか

1. 現代
 2. わが国
 3. 古美術品
 4. 自然
 5. 世界に誇れるもの
- 13 カミキリムシには、漢字だと てんぎゅう (天牛) という字をあててあるが、うまい字をあてたものだと思う。節くれ立った触角^{しよつかく}がこの虫で一番目立った特長である。これはちょうど牛だと角が目立つようなものだろう。牛といえばすぐだれでも角を思い出すが、そのようにカミキリムシというと、すぐあの角のようにじょうぶな長い触角、すなわち、体の一倍半から二倍半、種類によってはからだの三倍もある触角を思い出す。そこで牛という字をあて、空中を飛ぶ牛だから「天牛」といったものだ。

カミキリムシの特長は

1. 空中を飛ぶこと
2. 天牛
3. 触角
4. じょうぶな角
5. からだがふしくれだっていること

14 冬にとじこめられたマゼランの船休は、この悲しい入江に四か月、五か月

とどまっていた。この恐しい孤独の境においては時間の経過はむなしく、
重重しく遅遅たるものであった。しかし安逸ぐらい人間を不満にするもの
はないことをよく知っていたマゼランは、最初から人夫たちに、たえまな
い張りつめた仕事を与えた。

マゼランが仕事を与えたのは

1. 水夫の不満が生じないため
2. 遊びを禁ずるため
3. 航海が終りに近づくから
4. 水夫の体力を強くするため
5. この入江に長くとどまるため

15 日本の国土は面積が狭く、完全なる食糧自給の望まれないことはやむなき
ところであるが、しかし食物生産の限界を広げることにはまだ余地がある。

砂を変じて金たらしめることは不可能でも、開墾開拓により、農地の改
良、農業技術の進歩等により、近い将来に一千数百万人分の食糧を増産す
ることは可能であるという。もちろんわが製造品を輸出して、国外から食
物を買う必要はますます緊要となり、その用意は少しも怠ってはならない
けれども、われわれがわれわれの子孫に、今より多くの食物を産し得る土
地をのこすことは、これはできることであるし、しなければならぬこと
である。

しなければならぬことは

1. 砂を変じて金たらしめること
2. 輸出を盛んにして食物を買うこと
3. 食糧を増産すること
4. 科学の研究により農業技術の進歩を図ること
5. 子孫に今より多くの食物を産し得る土地をのこすこと

16 きょうの朝、わが家では子供のために赤の御飯を祝いました。都会の生活
はとかがかがやく燈火のかげに夜ふかしをすることが多いが、子供ばかり
は夜も早くね、朝も早く起きますから、弟の方も、兄といっしょに早く床
をはなれました。兄は八才、弟は五才になります。お人よしの兄にくらべ
ると、弟はなかなかきかない気でおもちゃでも同じものが二つなければ承
知しないというふうです。

都会の生活は

1. 燈火がかがやいている
2. 夜は早く寝る
3. とかく夜ふかしすることが多い
4. 朝は早く床をはなれる
5. 子供は元気がよい

- 17 ピタゴラスの名は有名である。いまから約二千五百年前の数学者である。ギリシャ人はエジプトやバビロニアなど古代東方の人たちとちがって、ほんとうの学問を愛した。ピタゴラスやユークリッドは、ピラミッドの建設や土地の境を整理するなど、生活上の必要から生まれていた実用の、幾何（きか）という数の学問を、理くつのおった学問へとかえた。ピタゴラス、ユークリッド、ヒポクラテス、アルキメデス、アポロニウス、トレミー、パプス等は有名なギリシャの学者である。

ピタゴラスやユークリッドは

1. ピラミッドを^{けんせつ}建設したり、土地のさかいを整理した
2. 幾何を理くつ^{りくつ}の整った学問にした
3. 実用の幾何学をはじめた
4. エジプト、バビロニアの人である
5. 生活上の必要から学問を作った

- 18 茶の味は一口に言えば淡い。しかし玉露のようなものになると淡いうちにもなかなか芳烈なところがある。それをのんだ外国人たちが一晩眠れなかったといって、日本の茶のつよいに驚いていた。まったくわれわれでも夕飯すぎなどにうっかりつよい茶はのめない。

あの俳句などにしても、ちよっとそういう味がありはしないだろうか。外国の詩や漢詩などにくらべてもそれが思いあたる。

俳句は

1. 淡いうちにも芳烈なところがある
2. 外国人も感心している
3. 外国の詩や漢詩よりすぐれている
4. 淡いお茶の味がする
5. うっかり味わってはよさがわからない

- 19 ^{こお}海凍る御国の果てまでも流れ歩き候末、いかにしてもいま一度^いま一度^げひにいま

一度、東京に出で、みずから文学的運動を極度まで試験せねばと決心して矢もたてもたまらず、養わねばならぬ家族をも函館^{はこがて}の友人に頼みおきて、単身、緑の都には入り候ものの、いろいろなる市の物音、珍らしければにや、頭の中をくすくられるようになつかしく耳につきて、まだ物書く心地にもならず、かくては飢えて死ぬべきを、などと思いかえしつつ、やはりうつらうつらとたばこのみふかしおり候。

この石川啄木の手紙について、正しいのは

1. 啄木はこの手紙を函館で書いている
2. 啄木は緑の都を早く去りたいと思っている
3. 啄木は東京で文学の仕事に成功している
4. 啄木は東京でこの手紙を書いている
5. 啄木はこの手紙の受取人に家族を頼んでいる

- 20 たくわえた野菜はつき、ねぎ、ばれいしょの類まで乏しくなり、そうかといって新しい野菜がとれるに間があるというころは、毎朝毎朝わかめの味噌汁でも吸うよりほかに仕方のない時がある。春雨あがりの朝などに、軒づたいに土壁をほう青い煙をながめると、よい陽気になってきたとは思いますが、食物の乏しいには閉口する。また油くさい凍^{こおり}どうふかと思うと、あの黄色いやつが壁につるされたのを見てもウンザリする。淡雪のあとの道をびしょびしょ歩みながら、「草もちはいりませんか。」と、呼んで来る女のをききつけるのはうれしい。

女のをきくとうれしいのは

1. よい陽気になって、その気分にあざわしいから
2. 新鮮なたべものが得られるから
3. もちがだいすきだから
4. 新鮮な野菜がたべられるから
5. ひさしぶりで人の声をきいたから

第四部 推 理

1. いつのまにか、まっくらな雲が、空いっぱいひろがりました。風がさっ

と吹くと、大つぶの雨が、バラバラ降り出しました。おかあさんは、いそいで雨戸をおしめになりました。ピカリと光りました。大きいかみなりがゴロゴロとなりました。わたくしはびっくりして、おかあさんのそばへかけよりました。しばらくしてザアザアと、。

のなかには、どんな文が適切か

1. かみなりが、なりだしました 2. わたくしは大声で泣きました
 3. 雨戸がゆれました 4. 雨が降って来ました 5. 雨戸をしめました
- 2 春秋の遠足とか、夏の登山とか、音楽会とか、学校では四季おりおりのいろいろな催^{もよお}しものをもっている。十一月にはとくに催しものが多く、私たちは楽しい気分^{もよお}にひたる。このなかでも私にとってもっとも楽しいものはバザーである。そのバザーがいよいよ近づいた。

この文についてなにが書かれると思うか

1. 遠足のこと 2. バザーのこと 3. 登山のこと
 4. 音楽会のこと 5. 十一月のこと
- 3 「ビール、あれを。あっ、明かりをつけないで。」そういわれて、ビールも目をあげました。机においたうけ皿の上で、ぼーっと浮きあがって見えるかすかな光。これこそ二人がねがいもとめていたラジュウムであった。「おお、ラジュウムだ。ラジュウムだよ。」ビールも思わずくりかえしました。光は机の上においた小さなうけ皿の上で光っているのです。

ラジュウムをみてビールは

1. くやしがった 2. 実験をやりなおした 3. よろこんだ
 4. 明かりをつけた 5. うけ皿をきれいにあらった
- 4 「ごめんなさい。おじさん、ごめんなさい。ぼくはただ楽譜^{がくふ}をうつしていただけなんです。」「そうだったのか。おどろいた小僧^{こぞう}だ。」クリフトは、セバスチャンの所にあるたくさん^{なみた}のうつした楽譜を見つめて、いつのまにか目に涙^{なみだ}をためていた。

「セバスチャンよ、すまなかった。おとうさんから、おまえをあずかった

わしが、おまえにろうそくもかってやらないで、月の光などで勉強させて。」

クリフトはこれからどうしたと思うか

1. いままで通り、セパスチャンを使った
2. すぐ父の所へ帰してやった
3. うつした楽譜をみなとりあげた
4. あきれて音楽の研究を禁じた
5. ろうそくをかって、音楽の勉強をたすけた

5 目をさますと雨だれの音がしている。きょうはバレーの試合なのに、おもしろくもない雨である。学校へ行くと、思ったとおり、試合は中止だった。が、それでも選手たちは 。

のなかの文は

1. いっしょうけんめい練習をつづけていた
 2. ぶつぶつ不平をいっていた
 3. くやしがっていた
 4. よろこんでいた
 5. のんきに遊んでいた
- 6 すずめたちに数知れず宿をかしていた古い寺がしゅうぜんされた。さて、寺が新しくかがやくばかり美しいすがたになった時、すずめたちは前の古いすをさがしにもどってきた。ところが、古いすは、みんなかべにぬりつぶされてしまっていた。

もどってきたすずめたちは

1. もとのすにはいった
 2. また新しいすをつくらねばならなかった
 3. どのお寺だかわずれてしまった
 4. 寺が美しくなったのでよろこんだ
 5. のこっていたすをかりて、みんなはいった
- 7 「おばあさん、ここをちよっと借りたよ。」「はい、これはいっこう存じませんで。」「だいぶ降ったね。」「あいにくのお天気で、さぞお困りでござんしょ。おお、おお、だいぶおぬれなされた。いま、火をたいてかわかしてあげましょ。」「そこをもう少し燃しつけてくれれば、あたりながらかわかすよ。どうも少し休んだら寒くなったよ。」「へえ、ただ今たいて

あげます。まあお茶を一つ。』

作者は

1. 荷物だけはぬらさなかつた
2. おばあさんと仲がよい
3. ほがらかに笑っている
4. 茶屋で休んでいる
5. 青空をみながら、火にあたっている

8 わたしは、今まで姉というものについて深く考えたことがない。毎日毎日同じ家の中で暮していたから、考えるなどという余地がなかったのだろう。姉という存在に、ほとんど無関心ですごしてきた。この年も七月にはいり、だんだん暑さが増すころ、姉はつとめ先から早くかえって床についた。わたしは別に心配もしなかった。姉はもともと丈夫であったから、すぐ起きられると思った病気も、だんだん日数を重ねるようになった。

この作者は、こんどは病気の姉のことを

1. 今までのように考えない
2. いつもとちがう姉を、しんげんに考える
3. あまり考えないが看病はする
4. すこしも心配しない
5. しかたのないことだとあきらめる

9 夏休みになると、よく子どもたちは昆虫採集だといって野や山へいきま
す。いろいろの虫を集めることもたしかに勉強のひとつです。しかし集める
だけではまだ学問とはいえません。ほんとうの勉強はそのつぎから始ま
るのです。

ほんとうの勉強は

1. できるだけたくさん虫を集めること
2. 虫など集めないほうがよい
3. 虫を集めたそのつぎからはじまる
4. 野や山にたくさんころがっている
5. 夏休みにはよい勉強ができる

10 屋前は風通しのいい部屋で三毛と玉が四本の足を思うさまにのぼして昼寝
をしているのであった。夕方がくると、二ひきで庭に出て芝生の上でよく
すもうを取ったりした。二ひきはいつもいっしょにいた。きのうも台所で

瀬戸物のふれ合う音がすると思って行って見ると、戸をしめ忘れた茶だんすの上と下の棚から 。

にあてはまるのは

1. 二ひきが眠っていた
2. 二ひきがとぼけた顔でのぞいていた
3. 瀬戸物が、われていた
4. 一ひきの野良ねこが飛び出して逃げた
5. ねずみがぱっと飛び出した

11 啓三は二回もころんだが、まっくらい坂道を、まっすぐ走っていく。左ひざに痛みを覚え、小走りながら手をやってみると、血がにじんでいるようだ。その手で母からたのまれたふろしきづつみをしっかりと持ちかえた。町はずれの崩れ崖の中に残っている一本松が浜風で気味わるくゆれる。風で折れた枝は、やみの中でゆれ動き、啓三の脊すじを冷たくする。旅人を生きうめにしたという崖が、のしかかってくるような錯覚におそわれる。星のない夜空からぼつりと雨。怒っているような突風が顔をたたたく。

啓三は、この暗い夜道を、なんのために走っているのか

1. 坂道を走る練習のため
2. からだをじょうぶにするため
3. お使いにいくため
4. 医者を迎えに行くため
5. 海岸をみまわるため

12 白山町へ来ると道ばたで馬が倒れていた。馬方がバケツに水をくんで来ては、馬の頭から腹から浴びせかけていた。くびのまわりには大きな氷塊が二つ三つころがっていた。毎年盛夏のころには、しばしば出くわす光景である。こうまでならないうちに、こうなってからの手当の十分の一でもしてやればよいのにとすることである。朝日町の、とある横町を曲ると、やはり道ばたに荷馬車が一台とまっていた。大きな葉桜の枝が、道路の片側いっぱい影をひろげている下に、馬は涼しそうに休憩していた。馬にでも地獄と極楽はあるのである。

この文でいいたいことは

1. 馬が倒れたときは、水と氷塊がよい
2. 飼う人しだいで幸福な馬もあり不幸な馬もある

3. 夏には馬はすぐ病気になる
4. 事故のおきる前に注意しなければならぬ
5. 病気の馬はいたわらねばならない

13 「あわれ」という感じかた、これこそは年老いた^{さいしよなごん}清少納言が自分の生活や環境のなかに自分で見いだしたものです。それは清少納言が、現実の世界から、はるかに遠く美しい世界、いいかえれば宗教といった境地に対してあこがれの眼をむけるようになったからではないでしょうか。そのことは清少納言の時代の和泉式部^{いづみしきぶ}、紫式部^{むらさきしきぶ}、赤染衛門^{あかぞめえもん}にも共通していえることです。あるいはこの時代全体の傾向であったというほうがもっと適切かも知れません。紫式部のかいた源氏物語には、こういう時代精神がよく出ています。

「あわれ」という感じかたは

1. 清少納言のころの時代精神
2. 年老いた人の考えかた
3. 源氏物語にだけみられる考えかた
4. 和泉式部、赤染衛門の考えかた
5. 清少納言の若かった時の考えかた

14 「むかし竹取りのおきなというものありけり。」「ここより立入ることを許さず。」のように、私たちの話や文章には見られず、古い文体で書かれている文を文語文という。したがって私たちには、文語文は読みにくくなっている。しかし「雨がふりだしそうだ。」「雨降りいでんとす。」のように、文体はちがっても、単語をくらべてみると、口語と文語と、すっかり変わっているわけではなく、共通なものがすくなくない。

文語の文は

1. 現代語で書かれた文である
2. 雨が降り出しそうだと、いろいろな文のことである
3. 口語文と共通なところがすくなくない
4. 口語文と共通なものがほとんどない
5. わたくしたちの文章に多く見られる

15 私の処女作品といえ、まず「猫」だろうが、別に追憶^{ついき}する程のこともな

いようだ。ただ偶然^{ぐうぜん}ああいうものができたのであって、私はそういう時機に達したというまでである。というのが、もともと私には何をしなければならぬということがなかった。もちろん生きているから何かしなければならぬ。する以上は自己の存在を確実にし、ここに個人があるということを他にも知らせねばならぬ位の^{りようけん}了見は、常人と同じように持っていたかも知れぬ。けれども創作の方面で、自己を發揮しようとは、創作をやるまでは別段考えてはいなかった。

作品「猫」が出来上るまでの漱石は

1. 「猫」という作品を書きたいといつも考えていた
2. 常人が持っている了見は持つていなかった
3. 自己を發揮しようと前から考えていた
4. 何かしようという気持はあった
5. 常人よりすぐれた了見はもっていた

- 16 芭蕉^{ばしやう}は、その時代として新しい俳句にさきがけようとして苦心した。談林^{だんりん}派は、いわゆる新しい好みであった。だが芭蕉は談林派の作家として認められていくうちにも、その派のいき方にあきたらぬものがあった。この八年間は、芭蕉としては暗中^{もくさく}模索の時代だったといつてよるしい。こうして苦しんでいた芭蕉に、ほっと一つの悟りのように「これだ。」と思うものがみつかった。豁然^{かつぜん}として、ということばのように、芭蕉は目の前から霧^{きり}のはれたような境地を感じた。

芭蕉はなぜ苦しんだと思うか

1. 談林派の作家となるため
 2. 談林派にあきたらぬものがあったため
 3. 談林の人たちとの交際上のことで
 4. 談林派をおさえつけるため
 5. 談林派を自分の悟りでみちびくため
- 17 ある町角で、ひとりの若い背の高い西洋人の前で四五人比較的背の低い、しかし若くてりっぱな日本人が立話をしていた。何を話しているかわからなかったが、見てすぐ感じられたことは、その日本の紳士^{しんし}たちの西洋人に対する態度には、あたかも昔の家来が主人に対する如き、何かしらそうい

ったようなあるものがあるように感じられた。その西洋人がどれだけえらい人であったか知らないが、単にえらさに対する尊敬とは少しちがったあるものがあるように感じられた。

この文の作者は

1. りっぱな日本人の態度に感心している
2. その西洋人は、えらい人であると感じている
3. 昔の家来と主人との関係と同じような態度だと感じている
4. その西洋人は尊敬されていないと感じている
5. えらさに対する尊敬を感じている

- 18 旅の文学については、もっと書きたいことがあるが、このみじかい文では、古今のすぐれた三人の文学と、人生へよせる日頃の心情を記すことにとどめる。そして私もまた、亀井氏と同様「戦乱のあわたしい世にあって、ますます旅人の姿に思いをひそめるようになった」自分をあらためて知るのだ。

この文の前には、どんなことが書いてあったか

1. 旅の文学
 2. 脚本キョクベンの書き方
 3. ある一人の文学者の考え方
 4. 亀井氏の健康
 5. 作者の苦しみ
- 19 バイオリンを少しきりひくことができないへボ音楽家は、バイオリンの弦びんが四本なので不便だ。もっと弦が多くないといい音が出ないと言うかも知れない。少なくとも彼等はいい音を出さないのは事実で、どんないいバイオリンをひいても、ろくな音楽を奏することができないで、そして自分が悪いとは思わず、楽器が悪いというだろう。ある文学者が、「人生がくだらないのだから文学は書けない。」と、言ったこと聞いたことがある。それはこのバイオリンの悪口をいう音楽家以上に愚かな人間だと思ふ。

この文の要点は

1. 人はとかく不平をいいやすい
2. 音楽家や文学者はすぐれた才能がなくてはよい仕事はできない
3. とかく人は自己みじゆくの未熟さを考えずいいわけをいう
4. とかく人は自己の欠点をかくす

5. 自己の欠点に気づく人は、人生のくだらなさにも気づく

20 塔の尖端せんたんについている九輪くわんのあたりに浮雲うきぐもがただよっていてそれに夕陽が映って紅に染った、いわゆる天平雲てんぴやうぐもを背景とした塔を仰ぎたいというのが、私の長い間の願望であった。朱塔は周知の如く三重の塔であるが、各層もとしに裳層もとしがついているので六重の塔のように見える。この裳層の広がり塔は音調いんていと陰翳いんえいを与えている。白鳳はつほうの祈念いのねんに宿る音楽性は、ここにもうかがわれるであろう。

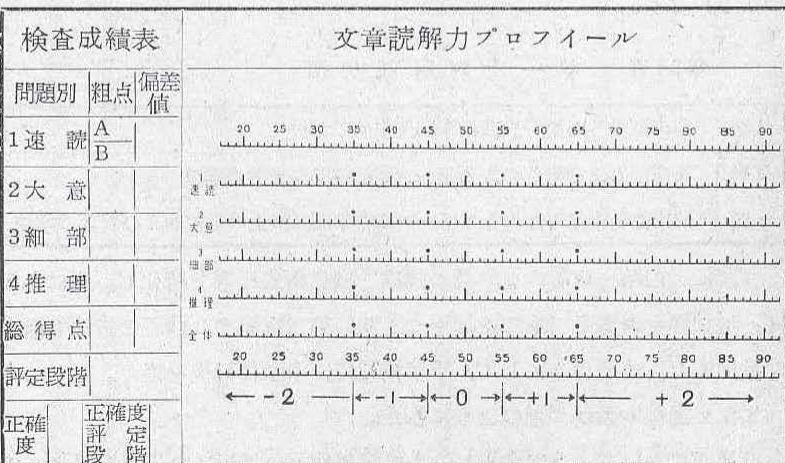
「白鳳の祈念に宿る音楽性は、ここにもうかがわれるであろう。」の「ここにも」というのは

1. 浮雲のこと
2. 天平雲のこと
3. 六重の塔のこと
4. 裳層の広がりのこと
5. 九輪のあたりのこと

名まえ		男女	所見
学 校	小学校		
学 年 組	年 組	番	
検 査 日	昭和 年 月 日		
知能年令(又はI.Q.偏差値)			

中学校一・二・三年用
文章読解力テスト

1. 速読のAは正答数、Bは試答数(やった数)を記入のこと



第5章 標本調査設計

この二種の読解力検査は、全県児童生徒の学力の状態を知り、またその学年全集団についての平均と分散を知って、学年ごとに基準尺度をつくらうとするものである。ところで、その目的をみたす為に、全数調査の方法をとることは統計数理の上からみても好ましい方法ではない。殊に、標準化の際の児童生徒数は、いずれも50,000人程度であった。しかも、これらの児童生徒は、全県に散在しているので、直接等しい確率で抽出することは、困難である。

○学校の層別と標本児童生徒の抽出

標本児童生徒を抽出するにはつぎのようにした。まず学校を層別し、つぎに各層より、一校を確率比例抽出法で抽出した。このようにして得られた標本学校から、必要標本数を、各学年ごとに無作為抽出して、標本児童生徒を決定した。

学校の層別には、全県の小中学校を、まず、旧市部・新市部および町部・村部と三つにわけた。この際旧市部・新市部および町部では、学校単位の保護者の第一次産業率（農業、漁業、林業）が55%未満の学校のみを考え、55%以上の第一次産業率をもつ学校は村部にいれた。したがって第一次層の層化はつぎのようになる。

第5.1表 第一次層層別基準

1層	旧市部のうち第一次産業率55%未満の学校
2層	新市部および町部のうち第一次産業率55%未満の学校
3層	旧市部新市部町部のうち第一次産業率55%以上の学校および村部の学校

つぎにこの第一次層内を学校の規模と職員構成比率で層化し、更に各層内では、地域性を考慮して第二次層をつくり、第二次層より前記の方法で標本学校を抽出した。このようにして、小学校32校、中学校31校を得た。

また必要標本数はつぎのようにした。

母集団において、5%含まれるものが無作為に抽出されることによって、標

本の中に± 1.5の巾をゆるして、3.5~6.5%の間に入る確率が95%となるようにした。これに必要な標本数は、つぎによって求められる。

$$2\sqrt{\frac{N-n}{N-1} \frac{P(1-P)}{n}} \leq 0.0155$$

ことにN=50000 P=0.05として n>831をうるから安全をはかって各学年約900名とした。この標本数を各層の大きさに比例割当をし、その標本数を、標本学校から抽出した。

これらの詳細な記述は、「新潟県立教育研究所経要第一集、学力検査作成についての標本調査法」および「第六集、算数学力検査」等を参照されたい。とにかく上述したように、学校を確率比例抽出し、標本割当に比例法を用いれば各児童生徒は層に関係せず、みな等しい確率で抽出されることになる。

第二次層について、各層から、確率比例抽出法によって、一ヶ校を抽出し、その標本学校から各層の児童生徒数に比例して、標本児童生徒を抽出したわけである。それぞれの抽出には乱数表を用いたのであるが、結果は、第5.2表のとおりである。

第5.2表(1) 標本学校および標本児童現徒の割当

小学校低学年用(1, 2, 3年)

第一次層番号	道番	郡市	学校	1年		2年		3年	
				児童数	標本数	児童数	標本数	児童数	標本数
I	1	新潟	上所	158	25	158	25	159	25
	2	"	木戸	235	17	232	17	232	17
	3	"	新潟	328	31	346	31	417	31
	4	新発田	外ヶ輪	343	31	284	31	323	31
	5	高田	東本町	253	32	239	32	236	32
	6	新潟	栄	279	40	292	40	306	40
II	7	小千谷	小千谷	362	38	356	38	421	38
	8	加茂	加茂南	357	38	320	38	382	38
	9	三島	出雲崎	172	22	159	22	186	22
	10	佐渡	沢根	97	17	89	17	112	17
	11	直江津	直江津	315	27	315	27	325	27
	12	北蒲	中条	289	28	255	28	265	28

	13	三	島	神	谷	25	21	20	21	28	21
	14	中	頸	櫛	池	61	24	51	24	48	24
	15	高	田	三	郷	55	30	66	30	46	30
	16	佐	渡	金	泉	82	31	76	31	69	31
	17	長	岡	桂		46	31	64	31	64	31
	18	岩	船	西	納	73	11	66	31	64	31
	19	見	附	新	瀧	65	31	54	31	46	31
	20	新	田	荒	川	47	28	39	28	44	28
	21	三	条	大	崎	93	28	106	28	97	28
Ⅲ	22	南	蒲	五	加	30	28	39	28	23	28
	23	中	魚	馬	場	35	22	59	22	70	20
	24	中	蒲	粟	津	75	24	87	24	73	24
	25	南	魚	土	樽	97	17	85	17	92	17
	26	南	蒲	中	冬	54	29	61	29	77	29
	27	東	頸	伊	沢	28	24	31	24	33	24
	28	佐	渡	畑	野	104	41	112	41	111	41
	29	南	魚	大	崎	149	26	113	26	172	26
	30	北	蒲	山	倉	110	27	99	27	88	27
	31	西	蒲	漆	山	162	41	145	41	145	31
	32	"	"	竹	野	59	20	60	20	58	20

第5.2表(2)

小学校高学年用(4, 5, 6年)

第一次 層番号	通 番	郡 市	学 校	3 年		4 年		5 年		6 年	
				児童数	標本数	児童数	標本数	児童数	標本数	児童数	標本数
I	1	新発田	猿 橋	175	25	140	25	166	25	189	25
	2	長 岡	川 崎	150	17	125	17	157	17	189	17
	3	新 瀧	浜 浦	255	31	141	31	214	31	236	31
	4	"	豊 照	289	31	196	31	223	31	269	31
	5	"	湊	293	32	179	32	219	32	310	32
	6	三 条	三 条	428	40	258	40	345	40	420	40
II	7	村 上	村 上	379	38	279	38	344	38	387	38
	8	六日町	六日町	163	38	160	38	187	38	222	38
	9	北 蒲	安 野	109	22	82	22	105	22	122	22
	10	西 蒲	曾 根	128	17	113	17	127	17	118	17
	11	栃 尾	栃 尾	240	27	150	27	209	27	289	27
	12	北 魚	小 出	235	28	148	28	199	28	272	28

Ⅲ	13	長岡	新組第一	32	21	19	20	28	21	26	21
	14	柏崎	安田	52	24	26	24	41	24	58	24
	15	東蒲	日出谷	49	30	31	31	52	30	58	30
	16	高田	稲田	85	31	38	31	77	31	76	31
	17	"	春日	50	31	38	31	47	31	26	26
	18	刈羽	北鱒石	71	31	33	31	58	31	75	36
	19	"	楨原	44	31	23	31	35	31	67	31
	20	古志	上北谷	58	31	40	37	48	28	51	28
	21	"	人面	33	28	19	19	30	28	29	29
	22	北蒲	藤塚	48	28	31	28	39	28	50	28
	23	東蒲	西川	37	22	33	22	33	22	52	22
	24	刈羽	荒浜第一	28	24	30	24	38	24	65	24
	25	北魚	川井	16	16	12	12	7	7	19	19
	26	南蒲	中条	51	30	30	30	47	39	45	27
	27	中魚	倉俣	37	24	30	24	41	24	41	24
	28	三島	西越	76	41	69	41	92	41	100	41
	29	刈羽	北条中央	77	26	69	26	65	26	92	26
	30	北蒲	紫雲寺	101	27	73	27	102	27	115	27
	31	加茂	七谷	107	41	88	41	93	41	128	41
	32	新津	新関	108	20	67	20	87	20	89	20

第52表(3)

中学校用(1, 2, 3年)

第一次 層番号	通 番	郡 市	学 校	6 年	1 年		2 年		3 年	
					児童数	標本数	児童数	標本数	児童数	標本数
I	1	新 潟	寄 居	小学校高学年に同じ	609	30	578	30	503	30
	2	"	関 屋		499	30	518	30	468	30
	3	"	山ノ下		561	30	478	30	447	30
	4	高 田	大 町		415	30	405	30	349	30
	5	新 潟	東新潟		568	23	580	23	570	23
	6	新 野	本 丸		302	23	326	23	336	23
II	7	三 島	片 貝		156	30	162	30	135	30
	8	中 蒲	白 根		236	32	276	32	228	32
	9	北 魚	堀之内		248	31	280	31	244	31
	10	"	小 出		220	22	322	22	233	22
	11	直江津	直江津		491	44	504	44	472	44
	12	糸魚川	糸魚川		304	29	316	29	266	29

第一次層番号	通番	郡市	学校	6年	1年		2年		3年	
					児童数	標本数	児童数	標本数	児童数	標本数
Ⅲ	13	中魚	六箇		26	22	46	22	46	22
	14	東蒲	上条		40	21	53	21	49	21
	15	"	鹿ノ瀬		155	26	178	26	170	26
	16	北蒲	本田		63	26	81	26	78	26
	17	刈羽	刈羽		119	26	119	26	137	26
	18	中蒲	十全		60	26	90	26	70	26
	19	柏崎	高田		73	26	80	26	94	26
	20	中蒲	根岸		73	27	92	27	70	27
	21	"	須田		69	27	80	27	77	27
	22	新井	鳥坂		77	27	89	27	73	27
	23	北蒲	亀代		111	28	119	28	115	28
	24	西蒲	天神		115	28	123	28	123	28
	25	北魚	湯之谷		60	30	64	30	60	30
	26	中蒲	曾野		90	30	120	30	93	30
	27	西頸	上早川		78	33	91	33	92	33
28	西蒲	浜松		110	44	132	44	110	44	
29	北蒲	笹岡		202	40	237	40	224	40	
30	南蒲	中野北		44	38	58	38	44	38	
31	北蒲	乙		197	21	175	21	160	21	

第6章 標準化

6.1 本テストの実施

本テストは、層化副次無作為抽出法によって、全県下から抽出された各学年約900名の標本児童生徒について実施した。小学校高学年用および、中学校用は、昭和31年2月28日から3月10日までの間に、小学校低学年用は、昭和32年5月13日から5月20日までの間に実施した。

○小学校1, 2, 3年用

I テスト実施上の一般的条件

このテストを実施するにあたっては、次のことがらに注意する必要がある。

- 1 この検査に先立って、特別な練習をしてはならない。
- 2 検査時刻は児童生徒のあまり疲労しない午前の第二時限頃が最もよい。
- 3 検査場は、児童生徒が平素の気持で十分実力をあらわし得る場所、したがって平素の教室がよい。
- 4 問題の解答のしかたは全員に徹底させなければならない。このため用紙中の「練習」によって説明すると共に、特に理解のおそい者には個別に相談をうけることも必要である。
- 5 問題の解き方についての質問はうけてもよいが、問題を読んでやったり、字句の説明その他の暗示的なことは絶対にしてはならない。
- 6 時間は正確に実施しなければならない。
- 7 検査者は、実施にあたっては、この手引を十分理解しておくことが必要である。

II テストの実施方法

〔1〕このテストの実施時間はつぎのとおりである。(疲労がはげしければ二部と三部の間に休憩をとる。)

第一部 (語い)		第二部 (簡文)	第三部 (複文)		第四部 (漢字)	計
絵	語	6分	絵	文	7分	44分
6分	7分		4分	14分		

〔2〕指示のしかた

- 1 これから国語のテストをやります。
先生のいうことをよくきき、先生のいうとおりにしておちついてまちがわぬように、またできるだけ速くやってください。
- 2 鉛筆二本を、机の上に出しなさい。あとはみな机の中に入れてください。
- 3 これから、検査用紙をくばります。表紙を上におきなさい。問題を読んではいけません。

—テスト用紙をすみやかにくばる—

- | | |
|---------------------|------------------------------------|
| 4 番号, 名まえを かきなさい。 | } 教師の方で, 校名, 氏名を
} 捺印して渡した方がよい。 |
| 5 学校, 学年, 組を かきなさい。 | |
| 6 検査年月日を かきなさい。 | |

—全部終わったかどうかをたしかめる—

- 7 これから テストのしかたを説明します。
- (1) いつも 先生のいうとおりにしてください。
 - (2) 「開け」といわないのに開いてはなりません。
 - (3) 「始め」といってから「やめ」というまで正確にしかもできるだけ速くやりなさい。
 - (4) 問題は番号の順にこなさい。しかし むずかしいのがあったら, 残してすみ時間があったらあとでしなさい。
 - (5) まちがっても消しゴムは使わないで, えんぴつで×じるしをつけてなおしなさい。
 - (6) 「やめ」といったら とちゅうでもやめなさい。
 - (7) 「用意」で鉛筆を もち, 「始め」でかく。「やめ」で鉛筆を机の上におく。
 - (8) ちっともわからないのにでたらめに○をつけてはいけません。
 - (9) 人のものをみてはいけません。
 - (10) テストは, 第一部 第二部 第三部 第四部と四つにわかれこまかには六つにわかれています。今やっている所以外は見てはなりません。
- 8 では, これから練習してみましょう。

(上段のなしの絵の語いをよむ。)

答が四つかいてありますが, そのうち絵にあったことばを○でかこんであります。では, 下の絵にあったことばをさがして○でかこみなさい。

(選択肢を一つずつ読んでやって, 一番よいつみきを○でかこみます。やりかたのわからないものがないようによくたしかめる。)

一 部 (1)

9 それでは一部の(1)をやります。(1)は、絵をみて、その絵にあったことばをさがすテストです。練習の時のようにやりなさい。

10 2頁を開きなさい。一部(1)は、4頁まであり、36題あります。(それぞれの頁をめくらせて、どこまでやったらよいかをたしかめさせる。)

11 終わった人ははじめから読みかえして、まちがいがあつたらなおしなさい。

12 「用意」——「始め」——6分——「やめ」

一部(2)

13 一部(2)の練習をしましょう。右がわは、上のことばと「なかまのことば」をさがすテストです。二ばんめの「おばさん」のなかまは「おじさん」ですね。○をつけましたか。左がわは、上のことばに、うまくつながることばを○のなかからさがして○をつけるテストです。おもしろい「おはなし」がよくつづきますね。おはなしの上に○をつけましょう。(たしかめる)

14 (2)は、5頁から9頁までで30題あります。(それをたしかめさせる。)

15 終わった人は、(2)の始めからよみかえしてまちがいがあつたらなおしなさい。

16 「用意」——「始め」——7分——「やめ」

二部

17 二部の練習をします。二部には短い文がならび、その下に番号がついています。下の絵のなかから上の文にあうものをさがし出して番号をつけるテストです。うさぎの絵の上に1とかきなさい。にわとりの絵の上には、2がつきます。こねこには、3ですね。

18 二部は、9頁から、13頁までで、14番まであります。(たしかめさせる。)

19 終わったら二部の始めから読みかえしなさい。

20 「用意」——「始め」——6分——「やめ」(疲労強ければ、このあと5分くらい休憩してもよいが、休まないことを原則とする。)

三部(1)

21 三部(1)の練習をします。文をよんで、おしまいに書いてある問題文のとおり下の絵に○をつけるテストです。

一ばん上の、とんでいるつばめに○をつけましたね。

22 これは、13頁から、16頁までで10題あります。(たしかめさせる。)

23 終わったら、始めから読みかえしなさい。

24 「用意」——「始め」——4分——「やめ」

三 部 (2)

25 三部(2)の練習をします。文のおしまいに問いかけの文があり、そのあとに答が四つかいてありますから、そのうち一ばんよいと思う答の番号を○でかこむのです。一つだけです。3を○でかこみましたか。(やりかたを黒板で示す。)

26 三部(2は、17頁から、23頁までで、20題あります。(たしかめさせる)

27 終わったら始めから読みかえしなさい。

28 「用意」——「始め」——14分——「やめ」

四 部

29 四部の練習をします。上の漢字のよみかたの答が、四つ、下に書いてあります。一つだけ正しいものを選んで、○でかこみます。下の問題では「しろい」をかこみましたね。

30 四部は23頁から、27頁までで70題あります。終わったら始めから読みかえしなさい。

31 「用意」——「始め」——7分——「やめ」

○小学校4, 5, 6年用および、中学校1, 2, 3年用

1 テスト実施上の一般的注意は、小1, 2, 3年用に同じ。

Ⅲ テストの実施方法

[1] このテストの実施時間はつぎのとおりである。

実施時間	第一部	第二部		第三部	第四部	計
	小学校	10分	15分	休憩5分	16分	16分
中学校	9分	15分		16分	16分	56分

〔2〕指示のしかた

- 1 これから国語のテストをやります。

先生のいうことをよくきき、先生のいうとおりにしておちついてまちがわぬように、またできるだけ速くやってください。

- 2 鉛筆二本を、机の上に出しなさいあとはみな机の申にしまってください。

- 3 これから、検査用紙をくばります。表紙を上にしておきなさい。問題を読んではいけません。

——テスト用紙をすみやかにくばる——

- 4 番号、名まえを かきなさい。

- 5 学校、学年、組を かきなさい。

- 6 検査年月日を かきなさい。

——全部終わったかどうかをたしかめる——

こ オから テストのしかたを説明します。

- (1) いつも 先生のいうとおりにしてください。

- (2) 「開け」といわないのに開いてはなりません。

- (3) 「始め」といってから「やめ」というまで正確にしかもできるだけ速くやりなさい。

- (4) 問題は番号の順にしなさい。しかし むずかしいのがあったら、残してすすみ時間があつたらあとでしなさい。

- (5) まちがっても消しゴムは使わないで、えんぴつで×じるしをつけてなおしなさい。

- (6) 「やめ」といったら とちゅうでもやめなさい。

- (7) 「用意」で鉛筆を もち、「始め」でかく。「やめ」で鉛筆を机の上におく。

- (8) ちょっとわからないのに、でたらめに○をつけてはいけません。

- (9) 人のものをみてはいけません。

- (10) テストは、第一部 第二部 第三部 第四部と四つにわかれています。今やっている所以外は見てはなりません。

8 では、これから練習してみましょう。

(問題文を二回よむ)

答が五つかいてありますから、その五つのうちいちばんよいと思う答の番号を○でかこむのです。一つだけつける。

(小学校では○のつけかたを板書でしめす)

(選択肢を一つずつ読んでやって一番よいものに○をつけさせる)

やりかたのわからないものがないようによくたしかめる。)

第一部

9 それでは第一部をやります。第一部は読む速さをみる問題です。それぞれの文の問いがありますから、よく読んでまちがわぬようやりなさい。

10 終わった人ははじめから、読みかえしまちがいがあつたらなおしなさい。

11 2頁を開きなさい。第一部は〔㊤2頁～7頁 ㊤2頁～8頁〕です。問題は30題です。

(それぞれの頁までめくらせて どこまでやったらよいかを たしかめさせる)

12 「用意」——「始め」——〔㊤10分㊤9分〕——「やめ」

第二部

13 第二部は文に書いてあることのうち、いちばんだいじなことや、文のすじをつかむテストです。文の大意、要点といってもよい。

問いのかいてないのもありますから、その時は文のだいじなことはなにかというふうに考えてください。

14 〔㊤8頁㊤9頁〕をひらきなさい。第二部は〔㊤8頁～13頁㊤9頁～14頁〕です。(それをたしかめさせる)

15 終わった人は もう一度 第二部の始めから読みかえしなさい。

16 「用意」——「始め」——〔㊤ ㊤とも15分〕——「やめ」(小学校はこのあと5分休憩)

第三部

17 第三部は文にかかれたことがらの細かい関係を考える問題です。

問題文につきに問いが書いてありますからよく読んでやりなさい。

- 18 (以下要領は第二部に準じる) ㊤14頁～19頁 ともに16分
 ㊦15頁～20頁

第四部

- 19 第四部は文に書いた作者の気持ちや、文の主人公の気持ちを考える問題です。
 これは文の中心思想をよみとる問題といってもよい。またその文がこれか
 らどうつづくかを、その人がそれからどうなるかを考える問題もありま
 す。

- 20 (以下第二部に準じて説明する。 ㊤20頁～26頁 ともに16分
 ㊦21頁～27頁

Ⅲ 採点法

- 小学校1, 2, 3年用

実施したテスト用紙は、そのまま研究所へ送ってもらい、採点や処理は研究
 所で行った。

各問題は1点とする。

正答表は、つぎのとおりである。

第6.1表 正答表

※選択肢番号は右上から、左下へ、A. B. C. Dの略号で示す。したがって1番
 の正答"い"とは、三番目だから Cにある。

35	33	31	29	27	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1	番号	一 (1) 語 い (絵)
C	D	A	B	C	C	C	D	D	B	D	A	C	C	D	D	A	C	正答	
36	34	32	30	28	26	24	22	20	18	16	14	12	10	8	6	4	2	番号	一 (2) 語 い (字)
C	B	A	B	A	B	D	A	B	C	B	B	B	C	B	B	D	A	正答	

※11番から、選択肢番号は、右から左へ横に
 A. B. C. Dとなっている。

29	27	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1	番号	一 (2) 語 い (字)
D	B	A	C	A	D	B	B	A	B	C	C	D	C	D	正答	
30	28	26	24	22	20	18	16	14	12	10	8	6	4	2	番号	一 (2) 語 い (字)
A	D	C	D	A	A	C	A	D	B	A	A	B	C	A	正答	

8	7	6	5	4	3	2	1	番号																
3	2	1	3	2	1	3	2	1	小番号															
F	A	C	F	E	C	E	C	B	F	B	D	B	E	C	E	A	D	F	A	D	A	C	E	正答

二、簡単な文

14	13	12	11	10	9	番号												
3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	小番号
F	D	E	F	E	C	B	D	A	A	C	D	C	B	F	M	C	F	正答

二、簡単な文 (続)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号						
A	くま	おも	ちや	C	とし	こ	A	とり	か	ご	B	D	D	B	C	正答

※絵の順位がま
きたらしい
たので、
ものも
ある。

三、(1) 複雑な文 (絵)

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
4	2	2	1	2	2	2	4	3	3	4	3	3	2	4	3	3	2	2	4	正答

三、(2) 複雑な文 (文)

読	時	近	休	気	家	音	男	国	高	日	人	人	月	上	立	本	漢字
1	1	4	3	2	1	3	4	2	4	4	4	1	2	3	3	2	正答
北	草	切	声	心	長	文	年	字	春	見	右	生	木	水	手	川	漢字
2	2	4	3	4	4	3	3	2	4	3	2	4	2	2	1	3	正答

四、漢字

路	楽	橋	事	感	客	形	強	急	喜	指	船	遠	遊	集	美	号	米	漢字
2	2	2	1	2	3	4	2	3	4	4	2	3	1	4	2	3	2	正答
里	荷	主	食	返	面	進	表	開	勝	室	運	開	動	鳥	教	瓜	明	漢字
4	3	4	2	2	4	4	4	4	4	4	3	1	1	3	1	4	4	正答

四、漢字 (続)

○小学校4, 5, 6年用

第6.2表 正答一覽表

小学校用

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第一部
4 2 3 5 2 3 2 1 4 3 5 4 2 5 3 5 2 4 1 2 5 3 1 4 2 1 3 2 1 5	正答	

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第二部
2 5 1 4 2 4 3 5 3 2 5 2 4 2 1 3 2 3 5 1	正答	

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第三部
3 2 4 5 1 5 2 3 2 1 5 5 3 5 2 1 4 5 3 4	正答	

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第四部
5 4 5 1 3 5 1 2 4 3 5 1 3 2 4 2 4 1 3 1	正答	

○中学校1, 2, 3年用

中学校用

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第一部
5 4 1 3 4 3 5 1 2 5 2 3 5 1 3 1 3 4 3 2 1 3 2 4 2 4 1 3 1 2	正答	

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第二部
3 1 2 4 3 5 3 2 3 2 5 4 1 2 3 1 5 4 3 2	正答	

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第三部
2 4 1 2 3 5 1 3 2 5 4 3 2 3 4 1 3 2 1 2	正答	

〇九八七六五四三二一〇九八七六五四三二一	番号	第四部
4 3 1 3 2 4 3 1 2 3 2 3 2 4 2 1 5 3 2 4	正答	

6.2 本テストの成績

○小学校1, 2, 3年用

第6.3表 全 県 の 成 績

学年	項目	問題	一部66	二部 42	三部 30	四部70	全 体 208
			(語い)	(かんたんな文)	(ふくぎつな文)	(漢字)	
1 年	標 本 数 n		901	901	901	901	901
	標 本 平 均 \bar{x}		23.8	14.2	8.1	16.8	62.9
	標 本 標 準 偏 差 s		12.69	8.15	4.95	6.40	27.76
2 年	標 本 数 n		904	904	904	904	904
	標 本 平 均 \bar{x}		38.2	23.7	14.4	36.5	112.9
	標 本 標 準 偏 差 s		13.46	9.44	6.26	8.51	32.97
3 年	標 本 数 n		902	902	902	902	902
	標 本 平 均 \bar{x}		48.2	30.0	19.0	53.4	150.6
	標 本 標 準 偏 差 s		11.56	8.64	5.86	10.41	32.13

第6.4表 小 学 校 4, 5, 6 年

学年	項目	問題	一 部	一 部	二 部	三 部	四 部	全 体
			(速読)	(正確度)				
4 年	標 本 数 n		886	886	886	886	886	886
	標 本 平 均 \bar{x}		13.8	71.1	8.1	9.0	9.0	39.9
	標 本 標 準 偏 差 s		5.46	19.9	3.86	3.99	3.65	15.05
5 年	標 本 数 n		895	895	895	895	895	895
	標 本 平 均 \bar{x}		16.3	77.2	10.2	10.7	10.9	48.1
	標 本 標 準 偏 差 s		5.36	17.36	4.23	3.85	3.99	15.67
6 年	標 本 数 n		902	902	902	902	902	902
	標 本 平 均 \bar{x}		17.7	79.1	11.6	11.5	12.2	53.0
	標 本 標 準 偏 差 s		5.75	16.88	4.13	3.86	4.07	16.02

第6.5表 中 学 校 1, 2, 3 年

学年	項目	問題	一 部	一 部	二 部	三 部	四 部	全 体
			(速読)	(正確度)				
1 年	標 本 数 n		901	901	901	901	901	901
	標 本 平 均 \bar{x}		11.6	68.2	9.2	9.2	9.7	39.6
	標 本 標 準 偏 差 s		4.94	22.42	3.76	4.08	3.67	14.6
2 年	標 本 数 n		896	896	896	896	896	896
	標 本 平 均 \bar{x}		13.0	68.4	10.3	10.2	10.7	44.1
	標 本 標 準 偏 差 s		5.56	21.32	3.94	4.43	3.98	16.15
3 年	標 本 数 n		894	894	894	894	894	894
	標 本 平 均 \bar{x}		14.0	72.6	11.2	11.4	11.7	48.4
	標 本 標 準 偏 差 s		5.84	20.22	3.95	4.46	4.15	16.39

第6.6表 正確度品等表

評定段階	σ	小 学 校 用			中 学 校 用		
		4 年	5 年	6 年	1 年	2 年	3 年
+2	+1.5以上	98~100	98~100	98~100	97~100	98~100	98~100
+1	+0.5~+1.5	70~98	85~97	90~97	83~96	82~97	86~97
0	-0.5~+0.5	64~69	71~84	74~89	58~82	59~81	66~85
-1	-1.5~-0.5	39~63	48~70	49~73	29~57	31~58	37~65
-2	-1.5以下	0~38	0~47	0~48	0~28	0~30	0~36

6.3 品等尺度

○小学校 1, 2, 3年

第6.7表 読解力品等表

評定段階	偏差値
+2	65以上
+1	55~64
0	45~54
-1	35~44
-2	34以下

○小学校 4, 5, 6年

中学校 1, 2, 3年

第6.8表 文章読解力品等表

評定段階	偏差値
+2	65以上
+1	55~64
0	45~54
-1	35~44
-2	34以下